夕刊三重　3月23日

松阪の知の系譜

本居宣長 小津久足 小津安三郎 (122)

フランス文学者
柏木隆雄

「東京暮色」も名作

「東京暮色」(1957年)は、冒頭、電車が高架を走る場面で、一瞬だけドイツ映画の看板「始めに罪あり」が映る。さりげなく物語の展開と帰結を一語で尽くして、実に鮮やかだ。部下と駆け落ちした妻(山田五十鈴)の罪から「始まり」、その娘(有馬稲子)の過ちを生む。もっと言えば姉娘(原節子)も好きな人があったが、父(笠智衆)の勧めで気の進まぬ結婚をして一女を生む。また妻に去られる父親も、京城への赴任が直接の原因ばかりでなく、それなりの罪があったと思わせる。

父の役は山村聰が予定されていた。彼なら風貌、物言いも含めて、妻が去るだけの何か癖のある陰影を見せて、悲劇の出どころを推察させ得たかもしれない。笠は人の良さが先に出て、それだけのあくが出なかった。小津の意図は、妻に去られた中年男を中心に描くことにあって、批評の関心が若者の風俗に集中したのを残念に思ったというが、父親の印象が薄くなってしまったのが、この映画での一番の失敗だろう。

「彼岸花」で使われた銀座「東哉」の湯飲み(小津安二郎松阪記念館提供)

悪友仲間が通うマージャン屋のおかみさんが母親と知った妹娘が、飲み屋で二人きりで彼女と話す際、「お母さん、嫌い!」と叫んで飛び出し、ぼうぜんと立ち尽くす母親のカットに続いて、バーの女給が店を出る客に「さようなら」と言う画面が続く憎い演出や、登場人物それぞれの運命が揺れる場面で、必ず時計と列車の響きが入るなど、個々に綿密極まる計算が施されて、あともう一歩のところで「東京物語」をしのぐ名作になったのにと惜まれる。

成瀬巳喜男の傑作「浮雲」は2年前。小津はその年の最高傑作と絶賛したが、不実な男を追い求める妹娘の心情につい肩入れしたかに見える小津の演出は、成瀬に対抗する気持ちが出たのかも知れない。

「東京暮色」に続く「彼岸花」(1958年)は、初めてカラーを採用、豪華な演技陣に加えて、大映の看板女優山本富士子を招き、一転して明るい映画となった。会社重役の父親(佐分利信)が、自分の知らぬ間に長女(有馬稲子)が結婚相手(佐田啓二)を決めたことに腹を立て、同じように男と同棲(どうせい)している娘を持つ友人(笠智衆)に同情する。父親が京都で定宿とする旅館の娘(山本富士子)が、長女に同情して彼女のために一芝居打って、父親も折れ、不服顔で結婚式にも出るが、蒲郡での同窓会のついでに、娘が新婚家庭を営む広島に列車で向かう。

佐田啓二の真率な二枚目ぶりと、彼の友人を自称する佐分利の部下の社員高橋貞二の軽妙なおとぼけぶり、旅館の女将(おかみ)浪花千栄子の達者な演技、田中絹代の毅然(きぜん)とした奥様ぶりが、映画を見た後、ほのぼのした情感に誘うが、娯楽性に傾くところに、前作「東京景色」の失敗を引きずる小津の心情が見えるような気がする。

サザランド賞はじめ名声はピークに達す

この年、小津がロンドン映画祭でサザランド賞を得て、日本的とされる彼の映画が海外で通用することを示し、また映画人として初めて紫綬褒章を受けた。翌昭和34年(1959)には芸術院賞を授けられ、名声はピークに達する。同年の「おはよう」は、そうした小津が少し息を抜くかのように、無声映画時代からのアイデアを取り上げ、折からの新興住宅地ブームを題材にしたホームコメディーだ。無声映画時代に小津がよく使った子役の芸名が青木放屁(ほうひ)であるように、放屁がこの映画のギャグの一つとなる。

(毎週土曜掲載)

【柏木隆雄さん(79)略歴】
1944(昭和19)年、松阪市殿町生まれ。大阪大学、大手前大学名誉教授。著書に「バルザック詳説」、翻訳にバルザック著「暗黒事件」など。

松阪の知の系譜

本居宣長 小津久足 小津安二郎

(121)

フランス文学者
柏木隆雄

サラリーマンの哀歓

「東京物語」（1953年）に続く「早春」の公開は昭和31年（1956）の1月。1年1作のペースが崩れたのは、小津安二郎が理事長を務めた「監督協会」の企画で、彼の脚本、田中絹代監督での「月は上りぬ」がスムーズに進まず、彼がその解決に奔走を余儀なくされたこと、中国での抑留を終えて帰国した親友内田吐夢の映画製作に世話を焼いたり、また予定した俳優のスケジュール調整が難航したことによる。当時監督小津の名声は、溝口健二、黒澤明、成瀬巳喜男らと並んで、その頂点にあった。

俗事に煩わされることを嫌った彼は、野田高梧との脚本執筆の場を、大船撮影所に近い茅ケ崎の旅館から、蓼科（たてしな）にある野田の別荘に移した。「早春」は野田の知る若いサラリーマン仲間の話から思い付いたという。

国鉄（現JR）蒲田駅から東京に通勤する若い男女のグループの一人で、幼い子供を亡くして夫婦の間がギクシャクしている男が、仲間うちの「金魚（煮ても焼いても食えない）」とあだ名される娘と一夜過ちを犯す。男は亡児の命日前夜に戦友会に出て、酔っ払った戦友二人を連れて帰って妻にあきれられ、その上通勤仲間から不倫をとがめられた娘が、夜遅く男の家を訪れて、翌朝、妻は家を出て友人のアパートに泊まる。転勤の辞令が出た男は、一時の迷いだったと娘に謝り、一人岡山の任地にたつ。そんなある日会社から帰ると、下宿で妻が待っていて、二人はやり直しを決意する。

日本が高度成長に差し掛かる時期、一挙に増えだしたサラリーマンの哀歓を、登場人物たちが口々に言うのは紋切り型に過ぎるが、主役の池部良のインテリ風の陰影ある風貌は、物言わずしてサラリーマンの悲哀と男の弱さを表し、淡島千景は下町生まれの人情を隠した勝ち気な妻を気丈に演じ、若い岸恵子が難役に挑んで成功している。笠智衆や山村聰、中村伸郎、杉村春子ら小津映画の常連が画面を引き締めるが、中でも戦友仲間の三井弘二と加東大介が秀逸だ。

戦友会で彼らが歌う「ツーツーレロレロ」は、原曲が台湾民謡のにぎやかで、野卑な歌だけに、いっそう帰還した兵の安堵（あんど）と屈託が一気に噴き出して、戦争の影を色濃く映す。彼らが戦死した兵をしのぶ姿は、翌日が命日の亡児への男の思いと重なるだろう。男もまた小津映画によく登場する戦争体験の鬱屈（うっくつ）を抱える一人だ。

夫婦愛の表裏を描く 友情の実相にも迫る

「早春」はサラリーマンの風俗を描くかに見えるが、実は夫婦愛の表裏、友情の実相を描いて鋭い。通勤仲間が不倫の娘を問いただす場面は、倫理や友情に名を借りた嫉妬と羨望（せんぼう）を告発して辛辣（しんらつ）だ。それは彼らが基盤とする会社員生活の一つの戯画でもある。

男が犯す不貞は、妻の不貞が問われる次作「東京暮色」（1957年）に連続する。部下と駆け落ちした妻が残した2人の娘を夫は男手一つで育てるが、結婚した長女は気難しい夫と折り合いが悪い。子供を連れて実家に戻ることが多く、妹は父に反発、無軌道に走る（石原慎太郎「太陽の季節」はその前年芥川賞）。妹娘が悪友たちと行くマージャン屋は、家出した母の店で、姉からそれを知らされた妹は、意図せぬ妊娠の果てに男に捨てられ、衝動的に轢死（れきし）してしまう。姉娘に妹の死を責められた母は、連れ合いと東京を去り、姉娘はわが身を母に重ねて夫の家に帰り、一人残った父は孤独をかみしめる。「暮色」の語の通り暗い展開だ。

（毎週土曜掲載）

蓼科の別荘で脚本を書きつつ何本も空けた「ダイヤ菊」（小津安二郎松阪記念館提供）

【柏木隆雄さん（79）略歴】
1944（昭和19）年、松阪市殿町生まれ。大阪大学、大手前大学名誉教授。著書に「バルザック詳説」、翻訳に「バルザック著「暗黒事件」など。

松阪の知の系譜

本居宣長 小津久足 小津安二郎 120

フランス文学者
柏木隆雄

名作「東京物語」の背景

名画の誉れ高い小津安二郎50歳の作「東京物語」(1953年)は、尾道に小学校教員の次女と暮らす老夫婦が、長男と長女のいる東京に行く話だ。東京郊外で開業医の長男は、子供部屋を片づけて父母を迎えるほど慎ましい暮らしで、往診にも行って父母を世話する余裕はない。場末で美容院を営む長女も仕事に忙しい。兄妹は費用を分担して両親を熱海に行かせるが、安い温泉宿は大勢の客や流しの演歌で騒々しく安眠できず、2人は早々に引き上げて長女の店に帰ってくる。

自宅での美容講習会がある長女の困惑を知って、妻は戦死した次男の嫁が一人住むアパートに、夫は東京にいる尾道の旧知を訪ねる。知人は昔の飲み仲間を誘って3人ではしご酒をし、深夜長女の家にその1人を連れてへべれけで帰る。翌日尾道への帰路、妻は体調を崩して大阪の三男の下宿に泊まるが、夫婦ともに無事帰宅との礼状が長男宅に届いた日に、次女から母の危篤の電報が来る。長男、長女は連れ立って帰郷。次男の嫁も会社を休んで駆け付けた。

その明け方妻は亡くなり、死に目に会えなかった三男も葬儀に間に合い、一家での食事の後、次男の妻と次女を残して、子供たちは早々に帰ってしまう。しばらく残っていた次男の妻は、兄たちの不人情を怒る次女に、大人になれば仕方なくそうなってしまうものだと説く。彼女が東京に帰る日、老父は自分の幸せを第一に考えてほしいと言って、老妻の形見の時計を渡す。帰りの列車の席で、彼女はその時計を取り出して、東京での新しい暮らしに思いを巡らす。

紀平昌伸映画ポスター展の「東京物語」(2022年原田二郎旧宅、青木律氏撮影)

笠智衆と東山千栄子の戦前派の夫唱婦随、長男山村聰、三宅邦子の戦後のインテリ夫婦、長女杉村春子と中村伸郎の庶民夫婦と、それぞれ三様の夫婦のありようを示して絶妙の風俗劇となり、「麦秋」(1951年)で戦死した次兄を慕う妹を演じた原節子が、今度は名前も同じ次男の妻として、当時その数の多かった戦争未亡人を慎ましやかに、かつ芯の強い姿で見せる。

彼女たちのいろいろ困難な生き方を含め、現実の生活に忙しい大人になった子供たちとその両親との共生など、今も身近な問題を映して胸迫るものがある。

舞台設定に感じる反戦のイメージ

あからさまに広島とせず、その近くの尾道を舞台としたのは、その距離の中にかえって反戦のイメージが立ち上るだろうし、老父が尾道の旧知と居酒屋で飲む場面に先立って流れる軍艦マーチは勇ましくも物悲しい。次男の嫁と老夫婦が観光バスで東京を巡る場面は、ありきたりの東京見物に見えながら、戦争の過去を背負う3人が東京の「今」を、それも移動するバスの中から見るだけに、過去と現在と、そして未来までが交錯する。デパートの屋上から俯瞰(ふかん)する東京は、映画全体の構図を映すものだ。子供たちの住む場所を老夫婦が確認するカットは、極めて意味深い。

老父母に子供たちが冷た過ぎる、という感想もあろうが、しかし彼らの言動をよく見、よく聞くと、冷たく振る舞った後で、その底に優しい感情もちゃんと見えてくる仕掛けになっている。妻の死の直後、埠頭(ふとう)で夫が朝焼けを見る有名な場面も、そうした愛憎を超越する世界を象徴的に示すだろう。

1957(昭和32)年ロンドンの「日本映画シーズン」で上映されて以来、この映画が海外識者のアンケートでしばしば最上位に評価されるのもうなずける。

(毎週土曜掲載)

【柏木隆雄さん(79)略歴】
1944(昭和19)年、松阪市殿町生まれ。大阪大学、大手前大学名誉教授。著書に「バルザック詳説」、翻訳にバルザック著「暗黒事件」など。

夕刊三重　2月24日

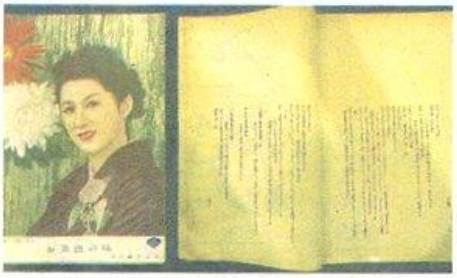
松阪の知の系譜

本居宣長 小津久足 小津安二郎

(119)

フランス文学者
柏木隆雄

昭和27年（1952）の「お茶漬の味」は、同14年（1939）に中国戦線から帰還した小津安二郎が池田忠雄と共同で書き上げた脚本「彼氏南京に行く」を、ほとんどそのまま用いたものだ。当時題名にある「彼氏」の語が検閲で引っ掛かり、出征の決まった主人公が妻とお茶漬けを食べることから「お茶漬の味」と題を変えると、めでたい出征にお茶漬けとは何事か！　とまた横やりが入って小津は断念。それを大作「麦秋」（1951年）の後、大筋はそのまま（共同脚本は野田高梧）戦後の話にして、夫の戦地出征を南米パラグアイへの海外赴任に変えてリメークした。



「お茶漬の味」のパンフレットとお茶漬のシーンのシナリオ（松阪小津安二郎記念館提供）

見合い結婚の夫（佐分利信）の無骨を嫌うお嬢さん育ちの妻（木暮実千代）は、富裕階層の女学校仲間と、何かと口実を作っては遊び、「夫は鈍感」と不満を言う。妻のめい（津島恵子）がお見合いをすっぽかして、夫や彼の亡友の弟で大学新卒の青年（鶴田浩二）と競馬やパチンコで遊んだのを憤った妻は、夫と口を利かず名古屋の友人を誘って須磨に遊びに行く。夫は急に南米赴任が決まり、妻に「用アル、帰レ」と電報を打つが、何のことか分からぬ妻は空港には現れない。旅先から夜遅く帰宅した妻が空虚感を抱く中、思いがけず飛行機の故障で出発が翌日に延びた夫が帰宅。二人でお茶漬けを食べて、妻は夫婦愛に目覚める。

肝心のお茶漬け場面インパクトもう一つ

当時映画会社から引っ張りだこで、芸達者で知られる木暮実千代は、艶っぽさが勝って、お嬢さま育ちの初々しさに欠け、また佐分利もあまりに落ち着いて、鍵となるお茶漬けのシーンが、中年夫婦のくたびれた感じさえして、妻の回心のインパクトを弱めた気がする。お茶漬けを一緒に食べる妻が、以前に夫の汁掛けご飯をとがめた際「インティメートな、プリミティブな遠慮のない楽な暮らし」と夫が説いた言葉を繰り返すのも、両者共にとても使い付けていないように思われる英語のせりふのために、映画の感動を薄っぺらにしてしまったきらいがある。戦前版ではなかったはずの英語をなぜ使ったのか。あるいは進駐軍時代への揶揄（やゆ）かもしれない。

戦中の作品をリメーク

また中国戦線南京への出征なら、死と隣り合わせの実感があるが、良く知らない遠い国というだけで生死の切迫感がやや希薄なラグアイへの赴任は、妻の回心の糸口としては弱過ぎよう。

ただ鶴田浩二のはつらつとした青年、津島恵子の初々しいお嬢さんが画面を明るくし、汁掛けご飯のうまさを夫と共感する女中の小園蓉子のかれんさや、夫の海軍の元部下でパチンコ屋を営む笠智衆が「戦友の遺骨を抱いて」を歌う場面など注目されるが、これが出征に変えた南米赴任とうまくつながれば映画の重みもまた違ったのではないか。

小津畢生（ひっせい）の名作「東京物語」（1953年）はこの作品の後に来る。「晩春」（1949年）、「麦秋」の初夏と来て、季節は夏。映画はまず暑さを思わせる港の埠頭（ふとう）で季節と場所と停滞感、次に通学する夏服の小学生たちのショットと、続く遠景に列車を連ねて走る蒸気機関車で人生の始まりと旅とを、その前景に並ぶ各家の煙突から昇る煙が、「民のかまどのにぎわい」を暗示した後、旅支度する老夫婦が登場する。2人がこの町での人生を想（おも）い、わが子の小学生の頃の姿を想い描きながら、彼らと再会して家庭のだんらんを楽しみにしている心象が、冒頭の数シーンで見事に映しだされることになる。（毎週土曜掲載）

【柏木隆雄さん（79）略歴】
1944（昭和19）年、松阪市殿町生まれ。大阪大学、大手前大学名誉教授。著書に「バルザック詳説」、翻訳にバルザック著「暗黒事件」など。

夕刊三重　2月19日

松阪の知の系譜

本居宣長
小津久足
小津安三郎
118

フランス文学者
柏木隆雄

「麦秋」既婚組と未婚組

「宗方姉妹」（1950年）は興行的には成功したが、必ずしも名作とは言えまい。姉妹が新旧やや画一的に描かれていたり、なぜ姉が自堕落な夫に最後まで尽くし、元の恋人と別れるのか、その彼に対する妹の気持ちなど、他にも説明不足と思われる箇所がある。

翌年の「麦秋」は、小津と脚本を共同執筆した野田高梧が会心の作と誇るように、細部まで行き届く、実に丁寧な描き方で感動を呼ぶ。麦秋は麦が実る初夏を言うから、「晩春」（1949年）に続くことが暗示されるが、ヒロインの名も同じ紀子（原節子）で、28歳の独身。両親（菅井一郎・東山千栄子）や医師の兄夫婦（笠智衆・三宅邦子）など、家族が未婚の彼女を心配する構図は同じだ。

彼女が勤める会社の専務（佐野周二）も友人の中年独身男を紹介するが、彼女は女学校の親友（淡島千景）と未婚女性の自由を楽しみつつ、大家族での自分の場所に苦しんでもいる。兄の医局の部下（二本柳寛）は、出征して帰らぬ紀子の次兄の友人で、妻を亡くして母親（杉村春子）と幼い娘と近所に暮らし、彼女の一家とも親しい。その彼に兄が秋田への転勤を勧め、それを受けたのを心配する彼の母親から、あなたがお嫁に来てくれたら、と言われて彼女は同意する。意外な展開に家族は戸惑うが、結局本人の気持ちが大事だと許す。両親は故郷の奈良に帰り、兄は家で開業することにし、紀子は秋田に去る。一家離散の前に記念写真を撮って奈良に帰った両親は、折しも麦の穂の揺れる中を行く花嫁の行列を見て娘をしのぶ。

「麦秋」の同窓生の集まり。右から原節子、淡島千景、志賀眞津子、井川邦子

極めて緩やかなテンポで淡々と進むかに見える物語は、その中に親子の問題、夫婦のありよう、友情の形が、登場人物たちのせりふのやり取りの中で、しみじみと問い掛けられる。小津映画によく出る同窓生の気の置けない集まりは、ここでは紀子の女学校仲間で表され、既婚組と未婚組の言葉の応酬は、次作の「お茶漬の味」（1952年）で、既婚組の有閑マダムに引き継がれる。

それにしても何気ないシーンの一つ一つが、極めて綿密に構成されていて、例えば紀子が結婚を決めるその前に、喫茶店で秋田へ転勤が決まった男と兄を待ち合わせる場面。男が紀子の次兄の戦地からの手紙に麦の穂が一つ入っていたと告げると、それを欲しいと彼女が言う。麦の穂は別名「麦秀」で題名と同じ音、また「一粒の麦地に落ちて死なずば、ただ一つにてあらむ」以下の聖書の句を思わせる。喫茶店がニコライ堂の近くなのも、その連想を生むだろう。

麦の豊かな穂波 映画の最終を飾る

男の母親役杉村春子の名演で知られる息子との結婚を紀子が承諾する場面も、この麦の穂のエピソードが先にあってこそ唐突でなくなるのだ。そして麦は豊かな穂波として映画の最終を飾る。

「人生」、あるいは「生死」を暗喩する列車と時計がこの映画でも頻出するが、とりわけ子供たちが集まって模型の列車を走らせる場面は、それが子供であるだけに意味深く、そのすぐ後、父親が持って帰った長細い包みを、ねだった列車模型と思って子供が開け、思いもよらぬ食パンが出て、がっかりした彼がそれを蹴るのは、旅としての「人生」を暗示する列車と食パンの「生活」のぐう意を見事に映し出す。

冒頭波打ち寄せる浜辺を一匹の犬が歩く場面は、「男と女」（1966年）でルルーシュ監督が小津への敬意としてそのファーストシーンに借用したものか。

（毎週土曜掲載）

【柏木隆雄さん（79）略歴】
1944（昭和19）年、松阪市殿町生まれ。大阪大学、大手前大学名誉教授。著書に「バルザック詳説」、翻訳にバルザック著「暗黒事件」など。

夕刊三重　2月13日

松阪の知の系譜

本居宣長 小津久足 小津安二郎 (117)

フランス文学者
柏木隆雄

た。ただ、菊五郎が小津を希望し、小津も手を挙げた「鏡獅子」は、日本では一般公開されず、帝国ホテルでの試写会のみとなっている。

斬新なカメラワークを駆使した映画は、名人菊五郎の舞踊の精髄が見て取れるが、撮影の際カメラの位置をうるさく指定する菊五郎に対し、思うように撮りたい小津は、カメラにフィルムを入れず振る振りだけし、一方菊五郎の踊りは、何回撮り直しても寸分の狂いなく、小津は驚嘆したという（高橋治「絢爛〈けんらん〉たる影絵」文芸春秋、1982年）。名人同士のすさまじいエピソードだ。

「風の中の牝雞（めんどり）」（1948年）で戦後風俗を直視したのと異なり、「晩春」の古典回帰は、次の「宗方姉妹」（1950年）で一層明確になる。冒頭、京都大学のシーンに続く奈良の古寺の光景は、みるみるアメリカナイズする日本に対しての強い意思表示だろう。原作者の大佛次郎は、「帰郷」（1948年）でその風潮を主人公に嘆かせていたが、小津は原作によりながら、独自に変更を加えて、終戦で職を失った夫を支えるため

「宗方姉妹」で姉（田中）と妹（高峰）が薬師寺で話すシーン

古典芸能の粋をフィルムの中に

「晩春」（1949年）での能は2代目梅若万三郎で、昭和24年（1949）6月11日にその出演が決定、7月31日音声録音、8月初旬撮影と、共同で脚本を書いた野田高梧の日記にある、と小津安二郎松阪記念館の岩岡太郎学芸員からご教示を得た。

1935（昭和10）年に日本文化を国際社会に紹介する目的で撮影された6代目菊五郎の「鏡獅子」と合わせて、小津は万三郎の英姿で古典芸能の粋をフィルムに残し

「晩春」「宗方姉妹」で古典回帰

にバーを経営する古風な姉（田中絹代）と、姉夫婦と同居する戦後派のドライな妹（高峰秀子）との言葉の応酬の中で「新旧」のテーマを争わせる。

小津が初めて他社（新東宝）に招かれての作品の故か、やや滑らかさに難があるが、観客動員数1位なのは、新聞連載された原作の人気と上原謙など当時のスターを多数そろえたことにあろうか。

この年ブルーリボン主演男優賞を得た姉の夫役の山村聰（そう）は、戦前の矜持（きょうじ）だけ残って、意気衰えた階層の苦悩と自堕落を見事に示し、姉のフランス帰りの元の恋人（上原謙）も、優柔不断なインテリの茫洋（ぼうよう）としたくだらなさを浮き彫りにする。

しかし小津が描きたかったのは、姉のりんとした姿だろう。新しがる妹に彼女が「古くないことが新しいこと、本当に新しいことは、古くはならない」と断じる言葉は、数日後、妹が元特攻隊員の青年にそっくり繰り返して、本作の核心であることを示している。

実際、小津映画の大半が姉の言葉にそっくり当てはまるのではないか。毎回見直しても古びず、新しい。この映画の冒頭、医学部の教授で姉妹の父の親友（斎藤達雄）が、体への刺激ががんを誘発するが、人の生死は人の予測を超えることがあると説くのは、映画の終盤、離婚を切り出した姉に何度も平手打ちを食らわせたその夫が、妻の元恋人宅を訪れた後、酔いどれて帰宅し急死する場面と見事に重なる。教授の説く実験で耳にタールを何度も塗られるうちに発症するウサギ同様、夫は度重なる鬱屈に病んで死に至るのだ。

墓場に近い姉夫婦の家は、電車もまたそばを走り、画面で走る姿はないが、時折音だけが聞こえる。人生が旅であり、しかも死への旅の時の流れが「生」だと気付かせる工夫がそこにある。それにしても映画冒頭で姉妹が弁当を使う昼の薬師寺に人影がない。上映後、どっと人が来たそうだが、古寺ブームはその後になる。

（毎週土曜掲載）

【柏木隆雄さん（79）略歴】
1944（昭和19）年、松阪市殿町生まれ。大阪大学、大手前大学名誉教授。著書に「バルザック詳説」、翻訳にバルザック著「暗黒事件」など。

夕刊三重　2月8日

松阪の知の系譜

116

本居宣長
小津久足
小津安二郎

フランス文学者
柏木隆雄

「晩春」の山場の能楽堂

「晩春」（1949年）の印象的な場面は、京の宿での父娘の一夜だけではない。能楽堂で父と並んで能を見るシーンは、あたかも映画の半ばに当たり、大きな山場の一つとなる。

娘は思いがけず叔母から父親の再婚相手にどうかと聞かされた女性もそこに来ているのを知る。あるいはこれは父の見合いの席かも知れぬと娘は疑い、また思い返せば訪ねた叔母の家で女性を紹介されたすぐその後に、彼女自身の縁談を勧められた。あるいは縁談はこの女性からの話で、それには父の再婚話が絡んでいたのか？　娘の目は、舞台と父と女性の間を行きつ戻りつ、思いを乱す。この時、原節子の表情は実に豊かで、監督の演出もあったにせよ、心の嵐を表現して遺憾がない。女性としてのたしなみに抑制されながら、なお表情の変化と目の動きで、内なる嫉妬と憤りが鮮やかに示される。

「晩春」で、父（笠）と娘（原）が能を見る場面

能は「杜若（かきつばた）」。「伊勢物語」の恋の姿を杜若の精が歌い舞う。業平（なりひら）が各句頭5文字を折り込んだ歌「唐衣（からごろも）着つつ（来つつ、と掛ける）慣れにし（女性と親しくなると馴〈な〉れる、と掛ける）妻しあればはるばる来ぬる（着る、と掛ける）旅をしぞ思う」を踏まえた能で、映画は「植え置きし昔の宿の」と独吟で始まるキリの仕舞を、5分間最後までじっくり映す。「いずれが似たりや」と歌われる杜若と菖蒲（あやめ）は、娘と女性を暗示するか。しかも「花も悟りの心開けて」の歌唱が響く時、娘は顔も上げず、懊悩（おうのう）する。

遠い所に置いてきた妻が恋しい、という元歌に、妻を失った父親の心情が重ねられるが、娘はむしろ杜若の精が語る恋のさまざまを桟敷の女性や自分に重ねて思いを乱す。娘が「悟りの心を開く」のはまさしく京都なのだから、劇中能の選択は、太鼓方の金春惣右衛門によるというが、よくテーマに沿うものと言えるだろう。

それにしても、ここに映る梅若万三郎の素晴らしさ。足の運びから手の優雅な動きまで、その幽玄なたたずまいが画面を圧する。これを名人初代万三郎とすれば、彼は昭和21年（1946）に亡くなっていて、映画の撮影は24年（1949）の5月からだから、あるいは23年（1948）に襲名した2代目万三郎か。映像は初代のを採用したとも考えられるが、タイトルクレジットには初代とも2代とも書いていない。

黒澤明の「蝦蟇（がま）の油」（岩波書店、1990年）で、すさまじい雷雨の中「半部（はじとみ）」を演じる「万三郎の舞台を見ているうちに、その音は全く聞こえなくなり、「序の舞を舞いだすと、その姿に夕陽がさっと射したように思え」、「あ、夕顔が咲いた」と思ったと書いているのを、私はほんとかな？　と怪しんだりしたが、今回「晩春」の舞台を見て、黒澤の言葉がうなずけた。黒澤が見たのはもちろん初代万三郎だが、果たして小津の場合は初代か、2代か、識者の言を聞きたい。

寺院が多く登場する　そこに自らの死の影

「晩春」で、戦後沈滞していた小津が見事にカムバックしたといわれる。この作以降、小津の名作の基本的な構造が確かにそこに出来上がった。時代の風俗の中に置かれた親と子、家族、老い、そして死。寺院が多く描かれるのも単なる観光的意図でも懐古趣味でもない。そこに自ら死の影が映るからだ。

「晩春」に続く「宗方姉妹」（1950年）で、主人公夫婦が住む大森の家が、墓場近くに設定されるのもその流れの中にある。

（毎週土曜掲載）

【柏木隆雄さん（79）略歴】
1944（昭和19）年、松阪市殿町生まれ。大阪大学、大手前大学名誉教授。著書に「バルザック詳説」、翻訳に「バルザック著「暗黒事件」など。

夕刊三重　1月27日

松阪の知の系譜

本居宣長
小津久足
小津安二郎

(115)

フランス文学者
柏木隆雄

「晩春」は「父ありき」の変奏

「風の中の牝雞(めんどり)」(1948年)で、子供の治療費を得るために、母親が一夜身を売る是非が大きな問題だが、このテーマは「その夜の妻」(1930年)の娘を助けようと強盗を犯す父親と、彼を刑事からかくまう母親の話の延長にある。また「出来ごころ」(1933年)でも息子の急病に慌てる貧しい父親を見かねた年下の友人が、北海道の作業員募集に応じてその支度金を充てる。彼を行かせるのは忍びないと、当の父親が代わりに船に乗り込むが、残してきた息子が心配で船から逃亡するのも、喜劇仕立てながら、立派な犯罪になるだろう。それぞれ作品自体の本質に必ずしも関わるわけではないが、物語の大転換に紋切り型ながらよく使われる手で、小津の映画ではこうした一つのテーマが、変奏されて踏襲されることが多い。

小津自身失敗作と認める「風の中の牝雞」に続く翌昭和24年(1949)の傑作「晩春」も、「父ありき」の父と息子の関係を、父と娘に変奏したものと言えるだろう。父親の子に向けるまなざしが同じで、父子水入らずの旅行で絆を確認することも共通する。

スクリーンステージ「1949年ベスト・テン(晩春)」(小津安二郎松阪記念館提供)

あまりに有名なこの映画について紹介する愚をあえて冒せば、鎌倉で一人娘(原節子)と暮らす経済学の教授(笠智衆)は、大学の助手(宇佐美淳)を婿にと考えるが、彼は既に婚約者がいた。教授の妹(杉村春子)が持って来た縁談を、一人残る父を心配して娘は渋る。妹は同時に兄の教授にも再婚候補があると言い、娘は父と能をったろうと打ち明けて、誰も待つ者の無い家に帰り、リンゴをむきかけてうなだれる。海辺の波が打ち寄せるカットで幕。

京都の宿での二人が一室に寝て、会話し、寝入った父と、目をじっと開けて思いにふける娘のカットの背景に、何度か映る花瓶が、一つの性的陰影を表す、といった批評が出て以後、その他の場面についても細かな議論を呼んだが、改めて画面を見ると、それをわざわざ言わなくとも、とも思えてくる。それほどにこの場面は、父と周辺の事物の「静」と娘の開いた目と、浴衣の姿態が象徴する「動」とが、見事に調和して美しい。

性愛と言えば、帰宅後、父親が手に取るリンゴは、西洋美術で「パリスの審判」に代表される性愛の象徴で、父親がそれをむきかけて、途中でやめるのも、京都の宿での花瓶と対になるイメージと見ることもできる。このシーンを撮る時、小津は笠に慟哭(どうこく)するように指示したが、それまで全く従ってきた笠が断固拒否して、この形になったのだという。

小津作品に初出演 原節子が躍動する

原節子は初めて小津作品に登場。「大根」と言われていたのを、小津は彼女の個性を使いこなせぬ監督が悪いと言ったが、まさしく彼女はここで躍動している。列車を走る場面の多用や、大時計やはためく洗濯物、時計が多くの場面で登場したり、波打つ浜辺が何度も映されるなど、映画の定番の役割にも心惹かれる。

(毎週土曜掲載)

【柏木隆雄さん(79)略歴】
1944(昭和19)年、松阪市殿町生まれ。大阪大学、大手前大学名誉教授。著書に「バルザック詳説」、翻訳にバルザック著「暗黒事件」など。

夕刊三重　1月20日

松阪の知の系譜

本居宣長 小津久足 小津安三郎

(114)

フランス文学者
柏木隆雄

松阪の城跡から町を見た記憶の反映ではないか。

このあと小津はビルマ作戦に取材した映画を企画するが、軍部が許可せず、昭和18年（1943）戦況厳しい中、軍報道文学映画班員として、シンガポールに派遣され、そこで英軍撤退後に残された未輸入の洋画を思うさま鑑賞、同20年（1945）8月の敗戦で抑留されて、帰国は翌年2月になる。

この5年に近いブランクの後、戦後初となる「長屋紳士録」（1947年）は、坂本武が喜八の名で登場、「出来ごころ」などにつながる庶民物だが、主人公は喜八ではなく、彼と同じ長屋の寡婦（かふ）（飯田蝶子）と、靖国神社で占い師（笠智衆）が拾ってきた子供だ。彼女がその子を押し付けられて迷惑がっていたある日、子供が帰らず、心配した彼女は、占い師が連れて帰ったのを喜び、共に暮らそうと決めるが、父親が現れて連れ戻していく。

1948年6月8日付「スクリーンステージ」（小津安二郎松阪記念館提供）

ここでも彼の戦場体験や抑留生活の影は顕著でない。いつもの小津的世界に徹しているようだが、上野公園の浮浪児を映して終わることや、世情の変化を嘆く登場人物たちのやや説教じみたせりふに、終戦直後の現実主義と理想とのギャップがリアルに描出される。

「父ありき」「長屋紳士録」

「風の中の牝鶏（めんどり）」では正面から社会見据え

しかし終戦直後の風俗が、過酷なまでに影を落とすのは翌年の「風の中の牝鶏（めんどり）」だ。夫（佐野周二）の帰還を幼い息子と待つ女（田中絹代）が、内職や自分の着物を売ることで苦しい生活に耐えている中、子供が急病で入院。治療代に困った女は、身を売って金を作れと誘っていた知人を頼り、その金を手に入れる。子供は助かり、折しも夫が帰還、下宿の2階で再会を喜ぶが、子供の入院費用の入手先を聞かれた女は、真実を打ち明けてしまう。

夫は事情を理解しながら、妻の不心得を許すことができない。地獄の日々を送りながら、ひたすら許しを乞うてすがりつく妻を、夫は下宿の階段から突き落としてしまう。ようようはい上がって来た妻を夫が抱きしめ、過去を忘れて未来を見ることを誓う場面で幕。

小津の中で評価がやや低いのは、場面展開が陰鬱（いんうつ）で、戦前あれほど純情可憐だった田中絹代が所帯やつれした人妻、二枚目だった佐野も、まさしく戦塵（せんじん）にまみれた復員兵の顔テーマがいかにも暗い。妻を落とした夫が介抱に駆け下りず、階段に突っ立ち、そのまま黙り込むなどは、今なら許されないだろう。「淑女は何を忘れた」では夫が妻へ、「戸田家の兄妹」は次男が姉に平手打ちして和解演出するのと共通する一種のショック療法の結末は、やり切れないのカタルシスとして作用しが、それは表面的なものに過ぎない。帰還兵や戦争未亡人、生活苦の根本的な揺らぎなど、終戦直後の日本がはらむ問題を正面から取り上げつつ、夫婦、親子、友情を描った一見ありふれた形を取って い掛けたのがこの映画だろうだあまりにストレートに過ぎたうだ。

（毎週土曜掲

【柏木隆雄さん（79）略歴】
1944（昭和19）年、松阪市殿町生まれ。大阪大学、大手前大学名誉教授。著書に「バルザック詳説」、翻訳にバルザック著「暗黒事件」など。

夕刊三重　1月16日

松阪の知の系譜

本居宣長 小津久足 小津安三郎

(113)

フランス文学者
柏木隆雄

「戸田家の兄妹」（1941年）は、当時の小津安二郎の映画では観客動員数も多く、ヒットする。封切りは3月。中国戦線が膠着（こうちゃく）して重い雰囲気の中、上流家庭の崩壊に、庶民はある種のカタルシスを、知識階層は「家族」の姑息（こそく）さに共感と反感を覚えて、戸田家の三女のけなげな生き方と次男の爽快さを歓迎したのだろう。軍国主義的な主張があからさまでないことも影響したかも知れない。

翌年公開の次作「父ありき」は、金沢の中学の数学教師（笠智衆）の親一人子一人の人生を、その死まで描くもので、父が引率した修学旅行で、禁を破った生徒が水死したことに責任を感じて辞職。故郷信州上田の中学に息子を進学させて、自分も村史として働くが、息子の旧制高校受験を機に、東京で会社員として働くことになる。大学を出た息子（佐野周二）はやはり中学の教員となり、徴兵検査の前に親子久しぶりで一週間温泉宿で過ごす。父は東京で再会した中学の元同僚（坂本武）と教え子たち（佐分利信、日守新一など）の招待を受け、うたげから機嫌よく帰宅する。折しも故郷での徴兵検査を済ませて東京に来ていた息子が迎えて、父は同僚の娘（水戸光子）との結婚を勧める。翌日父は倒れ、息子や同僚、その娘、教え子に見守られながら死に、新婚の息子夫婦が遺骨を故郷へ持って行く汽車の場面で終わる。

名古屋中京劇場の「劇場ニュース」（小津安二郎松阪記念館提供）

女手一つで一人息子を上級学校に進ませた女工が、成人した彼を東京に訪ねる「一人息子」（1936年）を、父母を逆にして、男親が息子の中学受験から徴兵検査までを見守る10年以上の歳月の推移を、巧みにせりふの中に織り込みながら、淡々と、かつ丁寧な画面が展開する。

戦争ただ中に「父ありき」

厳父という言葉のある通り、息子を甘やかさず、しかし目の奥で真の愛情をたたえて見守る父親像は、「父ありき」の題名を裏切らない。初め「落第はしたけれど」などで主演の斎藤達雄が父親役の候補だったが、小津は笠が「人間がいい。人間がいいと演技にそれが出てくる」と彼に決めたという（前出、松浦・松本編「小津安二郎大全」、229ページ）。実際彼は小津の抜てきによく応えて、無骨ながら愛情深い人間を誠実に演じ切った。

息子役の佐野周二は、戦場から帰還したばかりの29歳。終戦までに3度も応召し、「戦塵（せんじん）の間に汚れて（略）、明るく健康で、優しい笑顔の青年二枚目は（略）ふてぶてしさまで感じさせる軍曹上がりに」なったと言う人もあるように（猪俣勝人「日本映画俳優全史」教養文庫、1977年）、みずみずしい息子、というより思慮深い息子に見えるが、彼を常ににこやかに見る笠のまなざしが、二人の絆を象徴する。

親子が流し釣りする有名な場面は、「浮草物語」にも出てきたし、同窓会の場面は、「戸田家の兄妹」の佐分利信と同窓生との宴席以来、戦後の作品に何度も登場する定番だ。8代目文楽の名人芸の落語が毎回同じでも面白いように、小津独特の情景は、繰り返されるほどに味がある。

戦争語らぬ小津映画 軍威高揚感じさせず

注目すべきは、1942（昭和17）年という戦争たけなわの時であっても、この映画がほとんど現実の戦争を語らぬことだ。今見る現存フィルムは、進駐軍によって万葉集の歌や、笠が吟ずる藤田東湖の「正気の歌」、ラストシーンの「うみゆかば」の音楽などはカットされているが、そのままであっても、決して軍威高揚の感は浮かばない。

（毎週土曜掲載）

【柏木隆雄さん（79）略歴】
1944（昭和19）年、松阪市殿町生まれ。大阪大学、大手前大学名誉教授。著書に「バルザック詳説」、翻訳にバルザック著「暗黒事件」など。

夕刊三重　1月6日

松阪の知の系譜

本居宣長 小津久足 小津安三郎 (112)

フランス文学者
柏木隆雄

不況期のサラリーマンの悲哀を描く「生まれてはみたけれど」(1932年)から、「出来ごころ」(1933年)「浮草物語」(1934年)と3年続けてキネマ旬報ベスト1を得て、小津安二郎は32歳で日本を代表する監督になる。しかし1カ月間津の連隊で毒ガス兵器の特殊教育を受けたとされる昭和8年(1933)に続く4年後の陸軍召集が、順調に進んだ彼の人生に深い影を落とす。

その間、信州の綿糸女工(飯田蝶子)が期待して育てた息子(日守新一)の東京でのわびしい生活を見て失望するが、息子の優しさを知って安堵(あんど)して帰郷するトーキー映画第1作「一人息子」(1936年)、中流夫人(栗島すみ子)の尻に敷かれている夫(斎藤達雄)を、大阪から来た妻のめい(桑野通子)が気の毒がるが、ついに夫が妻の小言に平手打ちを食らわして、それが夫婦仲直りのきっかけになる「淑女は何を忘れたか」(1937年)を撮って、その年9月小津は東京近衛連隊に応召、上海に上陸する。中国戦線に投入され、帰国は2年後の7月。戦場での厳しい体験と2年の空白は、時節柄、表立っての発言はなかったが、深く彼の心にトラウマを残したことは、田中眞澄「小津安二郎周游(ゆう)」や平山周吉の近著「小津安二郎」に説かれている。

「戸田家の兄妹」の宣伝文(「八重垣週報」、小津安二郎松阪記念館提供)

戦争体験が彼の撮る映画にどのように反映されるか。映画人やフアンたちも、田坂具隆監督の「五人の斥候(せっこう)兵」(1938年)のような作品を期待したはずだ。帰還後、小津は「彼氏南京に行く」(のちの「お茶漬の味」の原型)に取り掛かる。しかしそれは検閲によって放棄を余儀なくされ、彼は「戸田家の兄妹」(1941年)

戦争体験の影はどこに

をもってそれに代えた。

子供たちと妻の還暦祝いを終えた後に実業界大物の父親が急逝。資産家のはずが多額の負債を抱え、長男は屋敷や骨董(こっとう)を売却して清算、母親は未婚の三女(高峰三枝子)と共に、長男夫婦(斎藤達雄、三宅邦子)の家に引き取られるが、邪険に扱われて長女(吉川満子)の家に行く。そこも長女のきつい性格と折り合わず、思い余って訪ねた次女宅も自分たちを引き取る気配がない。二人は鵠沼(くげぬま)の老朽した別荘で暮らし始める。一周忌に任地の天津から戻って事情を知った次男(佐分利信)は、兄たちを糾弾、一緒に天津に住もうと次男が言い、母と妹は同意する。

映画で父親が狭心症で倒れるのが69歳。小津の父寅之助も同じ病、同じ年齢で昭和9年(1934)に急逝している。その時の体験が下敷きにあると言われるが、俳優はスターを並べ、冒頭、広壮な屋敷の立派な庭での一家の記念撮影で始まるように、従来の学生や庶民とは異なり、「淑女は何を忘れたか」に続く上流社会の人々の生活が題材となる。家の間取りやそれらを丹念に映すカットは、戦後の小津映画に親しんだ目には、既視感にあふれるが、その安定したカメラワークが、例えば階段一つ取っても、見えぬ背後にあるドラマを観客に想起させ、家族の絆の思いがけないもろさが、登場人物のリアルなせりふに出て、「東京物語」(1953年)への連想に誘う。

「戸田家の兄妹」の中 中国の美をたたえる

それにしても、中国戦線で実戦を経験した小津に期待された皇軍の成果は、軍服すらも登場せず、ただ次男の着て帰る国民服と、中国天津は良い所だという言葉のみ。公開時は軍部により、戦後に残るフィルムもGHQの検閲で切られているから断言をはばかるが、父の遺品の中国磁器の美を骨董商に言わせ、床の間に敵国詩人李白の詩を掛けるところだけをとっても、声高でない小津の主張が見える。

(毎週土曜掲載)

【柏木隆雄さん(79)略歴】
1944(昭和19)年、松阪市殿町生まれ。大阪大学、大手前大学名誉教授。著書に「バルザック詳説」、翻訳にバルザック著「暗黒事件」など。

松阪の知の系譜

本居宣長 小津久足 小津安二郎 (111)

フランス文学者
柏木隆雄

小津映画の「寅さん」

「出来ごころ」の喜八 深川の職人がモデル

「その夜の妻」（1930年）で娘の治療費のために拳銃強盗に走る男を演じた岡田時彦は、翌年の「淑女と髯（ひげ）」では、堂々たるひげを生やした剣道の猛者で、そのため友人の妹の仲間も敬遠し、就職もできぬ大学生となる。

ひげを生やした岡田が、暴漢から救った女性（川崎弘子）の忠告でひげをそり、ホテルに就職、女性とも結ばれるが、友人の妹の誕生会で、余興を、と言われて、場にそぐわぬ剣舞を披露する所作が見事で、単なる白塗りの二枚目を超えた生彩を発揮、俳優としての非凡さを実感させる。もっとも小津が「俳優の手の上げ下げから、歩き方にまで細かい注文を付け」、妥協しないと言っているから（「小津安二郎座談会」、1935年4月刊「キネマ旬報」）、彼の手柄というべきか。

「出来ごころ」の坂本武（左）と大日方伝（松浦・松本編「小津安二郎大全」朝日新聞出版＝2019年、445ページ）

「出来ごころ」（1933年）は、時代は既にトーキーへと移りつつあったのを、あえてサイレントに徹し、「大学もの」、「サラリーマンもの」とは別趣の、無学な下町の庶民を主人公とした。

下町のビール工場で働いている子持ちの中年男喜八（坂本武）は、相棒の若者（大日方伝）と寄席帰りに、工場を首になって行き先なく、しょぼんと立つ娘を見つけ、一膳めし屋のおかみ（飯田蝶子）に託す。年がいもなく喜八は娘にほれるが、相談に訪れたおかみは娘は若者に気があり、二人を取り持ってくれと彼に頼む。そんな折、喜八の子供が急病で入院の費用が工面できず、見かねた娘が身売りして金を作るというのを止めて、若者が北海道の人夫に志願して費用を賄う。喜八は出発の前夜若者を殴って行けなくし、彼が北海道行きの船に乗るが、途中わが子かわいさに海に飛び込んで泳ぎ帰る姿で幕。

喜八の無学でとんちんかん、しかし素朴な人情味あふれる周囲とのやり取りは、まさしく「寅さん」の原型で、「寅さん」の本当らしさの欠けた、あざとい滑稽な言動よりも、小津の住む、すなわち小津久足の湯浅屋のある深川の職人が喜八のモデルという通り、はるかに真実味にあふれ、伏見信子演じる娘のかれんさと大日方の男っぽさ、飯田蝶子の優しくもとぼけた味がうまく溶け合った名作だ。

タイトルの「出来ごころ」とは何か。中年男が恋に落ちるのを言うのだろうか。冒頭、喜八が若者と一緒に場末の寄席で浪曲を聞く場面で、前の客が落とした財布を拾う場面は意味深長だ。「落第はしたけれど」（1930年）で大学の校庭で見つけた財布をこっそり拾う小使い役の坂本が、ここでも財布を取り込むのも面白いが、見つかれば「出来心」と弁解するだろう。出会った娘に声を掛けるのも出来心、泊めてやるというのも、親子げんかの仲直りに息子に50銭もの大金をやり、病の原因を作るのも出来心、人夫の肩代わりも、途中で逃げ帰るのも「出来心」から成る。人生は「出来心」が冒頭から暗示されるのだ。

翌1934（昭和9）年の「浮草物語」。坂本演じる喜八は座頭で、八雲恵美子が情婦の二代目中村鴈治郎が戦後に演じたリメーク版よりも、はるかに的密度が高く、旅役者の悲哀アルに演出されて、感動もひとせりふが字幕で語られ、かえって余韻が観客に伝わり、せりふわぬ分、監督指示の演技が際見える。戦後坂本はさえないに回ったが、トーキーに移生の俳優の地が赤裸に出るこなって、俳優たちの浮沈にもわったのだ。

（毎週土曜日掲載）

【柏木隆雄さん（79）略歴】
1944（昭和19）年、松市殿町生まれ。大阪大学、大前大学名誉教授。著書に「ルザック詳説」、翻訳にバルック著「暗黒事件」など。

夕刊三重　12月16日

松阪の知の系譜

本居宣長 小津久足 小津安二郎

(110)

フランス文学者
柏木隆雄

「落第はしたけれど」（1930年）で学生が駆使するカンニングの四十八手から、フランス映画「カンニングIQ＝0」（1980年）を思い出す。大学入学資格試験（バカロレア）の受験生があの手この手でカンニングに精を出す喜劇で、脚本・監督のクロード・ジディは、パリのシネマテークの小津の特集でこの映画を見ていたのではないかとさえ思えてくる。それほど欧米の映画人たちの小津評価は高い。ジディもカメラマンから監督になった人だ。アメリカ映画の影響濃い初期の小津映画が、フランスの作家に影響を与えたとすれば、誠に愉快な話だが。

よくそんな古い映画を見ているな、と言われる。実は10年ほど前小津の初期からほぼ全作、NHKのBS放映を片っ端から録画した。その頃NHKのBS映画は素晴らしい編成で、山田洋二の選んだ「日本映画100選」など、映画史の本でしか知らなかった古い映画をずらりと放映、壮観だった。近頃は米映画が圧倒的で、邦画が少し。しかも同じ作品が何度も繰り返される。他の民放BSの映画番組の方がよほど見応えがある（BS260は今月中旬小津の戦後作の特集）。

根は純真な「よた者」たち

懐古趣味と笑う人もあろうが、小津作品一つ取っても分かるように、映画は単に娯楽ばかりでなく、撮影当時の貴重な歴史資料としての価値を持つ。交通事情、家の造作、台所の小道具、せりふ一つ取っても、「時代」が色濃く出て、上映当時には何の変哲もない事件や恋愛模様にも、それが克明に映される。

初期の「大学もの」に並行して作られた「朗らかに歩め」（1930年）や蓮見重彦が「監督小津安二郎」（ちくま学芸文庫、1992年）で絶賛する「その夜の妻」（1930年）、そして「非常線の女」（1933年）は、いずれも根は純真ながら、まともな職を得られず、強盗を働くいわゆる「よた者」たちが登場して、恐慌期の暗い世相をあぶり出す。

二丁拳銃の八雲恵美子（松浦・村田編「小津安二郎大全」朝日新聞出版、428㌻）

例えば「その夜の妻」は、岡田時彦演じる失業者が、幼い娘の治療費のために拳銃強盗し、八雲恵美子演じる妻の元に逃げ帰る。妻は夫の拳銃で逮捕に来た刑事の拳銃も奪い、刑事を見張る間娘を夫に看護させて、不眠の一夜を刑事の前で過ごす。刑事は妻のけなげな行動に驚きながら、夫婦の子供への思いを察して、眠ったふりで男を逃がすが、男は家に戻って自首、連行される。

「その夜の妻」の舞台は無国籍的なアパート

探偵小説を紹介して当時人気の雑誌「新青年」掲載の翻訳小説を、ほとんどそのまま日本に置き換えた作品で、冒頭の強盗場面、および警察との追っ掛けを除いて（笠智衆が数秒警官の役で出る）、夫婦の安アパートの部屋のみで展開、しかもその部屋にはやはりアメリカ趣味のポスターやペンキ缶などがあふれて、いったい男の職業は何なのかといぶかしいが、この無国籍的背景が、極めて日本的な八雲恵美子が二丁拳銃を構えるという、アメリカのギャング映画もどきの場面を異様と見せぬ小津の演出の妙がある。

病床の娘に添う夫、妻と刑事その配置の緊張感が、静かな室の中にみなぎり、それがヒューニズムにあふれる結末の安堵んど）感に導くことになる。「窃盗、逃亡などを扱った溝口健の「折鶴お千」（1935年）陰影深い中にもスピーディー面展開と比べれば、カメラワの相違がよく分かるだろう。

それにしても刑事役の男が馬天狗（てんぐ）横浜にあらわ（1942年）で嵐寛寿郎と対する悪漢中国人を演じていた山本冬郷（とうごう）とは！

（毎週土曜掲

【柏木隆雄さん（79）略歴】
1944（昭和19）年、松阪市殿町生まれ。大阪大学、大手前大学名誉教授。著書に「バルザック詳説」、翻訳にバルザック著「暗黒事件」など。

松阪の知の系譜

本居宣長
小津久足
109
小津安二郎

フランス文学者
柏木隆雄

若き笠智衆、快活な役

昭和4年（1929）4月公開「学生ロマンス　若き日」には、前回述べた他にも小津安二郎後年の名作を思わせるカット、例えば心を通わせる二人が並んで同じ方向を向いて話したり、物を食べたりする場面もある。

特筆すべきは、小津の現代劇第1作「若人の夢」（1928年）でほんの端役で出て以来、遺作「秋刀魚の味」まで、ほとんど小津の映画に出演している笠智衆が、スキー部員としてりりしく登場していることだ。中年以降の役どころの多かった笠は、訥々（とつとつ）とした口調と渋い風貌の印象が強いが、ここでは快活で精悍（せいかん）な姿を見せる。

笠自身の「今の僕からは想像もできんでしょうが、当時は、わりとりりしい顔立ちをしとったんです」という言葉（笠智衆「大船日記　小津安二郎先生の思い出」扶桑社、1991年）はうそでない。この真面目そうで快活な感じが小津に愛されたのだろう。

戦前の小津映画の常連飯田蝶子もちゃんとヒロインの女学生の叔母の役で出ている。「若き日」の4カ月前の作品「肉体美」は、夫をモデルに描く女流画家の絵よりも、夫が描いた絵の方が入賞して、今度は妻がヌードのモデルへと逆転する喜劇だが、三枚目の女優飯田蝶子を主役とするところに小津の才気が見える。撮影の際、床の電気コードが映らぬように、カメラをローアングルにしたのが、有名な小津のフレームワークの由来だともいう（松浦莞二・松本明子編「小津安二郎大全」朝日新聞出版、2019）。

下宿に貼られたアメリカ映画のポスター、主人公のセーターにある逆さまのRはロシア文字で「私」を意味すると言われるが、演じた結城一朗が先に雑誌「R」の編集に携わっていたのを諷（ふう）するか。その他小津がさりげなく見せるシャレたアイデアの数々は、自ら楽しみつつ、目ある観客、もっと言えば外国での観客さえ考えていたような気さえする。

「大学は出たけれど」のタイトルは流行語に

その意味でも、続く作品の「大学は出たけれど」や翌年の「落第はしたけれど」など、「学士さまなら嫁にやろ」の言葉に見る一般庶民には憧れの的でしかない大学を舞台に、そのユートピア性を、失敗しながらも屈託のないのらくら学生たちの生態によって喜劇調で皮肉に演出し、その底に、1930年代の昭和恐慌の不安に揺れる閉塞（へいそく）感を、就職に苦心する大学生を通して浮かび上がらせている。「大学は出たけれど」のタイトルが当時の流行語になるのも、映画がマスコミュニケーションの大きな威力となることを如実に示したものだった。

「大学は出たけれど」で高田稔、田中絹代のスター俳優が初めて登場するが、70分作品で、現在わずか10分のフィルムでも、その片りんがうかがえる。「落第はしたけれど」も、落第生を斎藤達雄、彼に好意を寄せる喫茶店の娘を田中絹代が演じて、そのかわいさといささかボーッとした斎藤達雄のコントラストが面白い。

斎藤は「若き日」と同じように、試験場で背後の友人に見せるために、カンニングペーパーとして、ワイシャツの背中に試験に出そうな所を徹夜で墨書するが、クリーニング屋が間違って持って行き、試験当日の朝、真っ白で返ってくる。カンニングのさまざまなテクニックも虚実を交えて面白く、休み時間に学生仲間があいさつ代わりに披露するラインダンスもモダンで、この頃の小津が楽しんで作っていることがよく分かる。

（毎週土曜掲載）

松浦・松本編「小津安二郎大全」朝日新聞出版、2019年）のカバー

【柏木隆雄さん（79）略歴】
1944（昭和19）年、松阪市殿町生まれ。大阪大学、大手前大学名誉教授。著書に「バルザック詳説」、翻訳にバルザック著「暗黒事件」など。

夕刊三重　12月2日

松阪の知の系譜

本居宣長
小津久足
108
小津安二郎

フランス文学者
柏木隆雄

現存する第7作「若き日」

小津安二郎の監督第1作、時代劇「懺悔（ざんげ）の刃（やいば）」（1927年）から、翌年には「若人の夢」、「女房紛失」、「カボチャ」、「引っ越し夫婦」、「肉体美」と5作撮り、昭和4年（1929）2月の「宝の山」まで、残念ながらいずれもフィルムも脚本も残っていない（松浦莞一・松本明子編「小津安二郎大全」朝日新聞出版、2019年）。その6作ともに1時間前後のものだが、同年4月の「学生ロマンス　若き日」（1929年）は全編1時間43分の長尺サイレント映画で、小津作品で残る最古のフィルムとして今もDVDで見ることができる。

早稲田の学生とおぼしい主人公渡辺は、2階の下宿の障子に表から見えるように「貸間あり」と貼り紙をして、男の客が来れば、もう自分が借りていると追い返し、妙齢の女学生が来ると、それじゃと自分が引っ越して、友人の山本の下宿に転がり込み、翌日忘れ物をしたと女学生の下宿に上がり込んで長居する要領の良い怠け者。一方の山本は真面目ではあるが、鈍くさく、2人とも大学の試験を心配しながら、下宿を譲った女学生にそれぞれちょっかいを出す。

その女学生が赤倉にスキーに行くと聞いて、2人は質屋から金を借り、質草だったスキーも受け出して、大学のスキー部の合宿に参加。スキー場での彼女を挟んでの恋のさや当ての後、実は娘はスキー部主将の見合い相手と知り、失意の彼らは試験にも受からず、戻った下宿でゴロゴロしつつ、また「貸間あり」の札を出すところで終わる。

アール・デコ調のタイトルをはじめ、全編モダンな意匠にあふれるが、下宿の机の人形や洋書で埋まった本棚など小道具の使い方とか、カットの工夫、例えば戦後の作品にもたびたび挿し込まれる空に伸びる工場の煙突のショットなどが、初期のこの映画でも、主人公の下宿から見える煙突や、赤倉のスキー宿へ駅から行く道に何本も立ち並ぶ電信柱などにも既に見られ、「貸間あり」の貼り紙の美的な構成、旅を強調するスピード感あふれる線路が意味ありげに現れるなど、後年の小津の映画を知る者には、おぉ、懐かしい！と声を出す発見が多くある。

早大生渡辺を演じる結城一朗が慶応出という楽屋落ちも笑えるが、山本役の斎藤達雄は、当時人気の喜劇俳優ハロルド・ロイドの風貌そっくりに、ロイド眼鏡にロイド流のパントマイムとギャグで、恐らく当時の観客は大笑いしたことだろう。「ペンキ塗り立て」の電信柱に手をつき、その手で顔を拭ったり、買ったばかりのスキーがデート中に勝手に山を滑って、それを拾おうと慌てて追っ掛けるシーンなど、ロイド映画の滑稽をそのまま見る思いだ。

私の次兄は中学生の頃、近所のおばさんに「若い時の斎藤達雄に似ている」と言われたことがある。その頃私たちが知る斎藤は中年のおじさんでピンとこなかったが、なるほど、この映画の斎藤はその頃の次兄を思い出させて納得した。

「大学もの」の連作ではユートピア描いたか

それにしても、この後いわゆる「大学もの」が続くが、試験に落ちる学生の悲しくも滑稽な姿がよく映される。受験に失敗した人の苦い思いと共に、当時同世代の1割強しか行けなかった大学がつのユートピアとして描く意図があったのではないか。

渡辺に質屋に行くアイデアを与い付かせる下宿の部屋に貼られた米映画「第七天国」のポスターをはじめ、全編にみなぎるアメリカ趣味の小道具は、「大学」とともに観客の憧れを演出するものだったのかも知れない。（毎週土曜掲載）

【柏木隆雄さん（79）略歴】
1944（昭和19）年、松阪市殿町生まれ。大阪大学、大手前大学名誉教授。著書に「バルザック詳説」、翻訳にバルザック著「暗黒事件」など。

夕刊三重　11月25日

松阪の知の系譜

本居宣長 小津久足 小津安二郎 (107)

フランス文学者
柏木隆雄

受験に失敗、代用教員に

大正10年（1921）3月旧制宇治山田中学を卒業した小津安二郎は、その年旧制神戸高等商業を受験して失敗、翌大正11年三重県立師範学校の受験にも落ちて、3月31日飯高町宮前の尋常高等小学校の代用教員となり、5年男子組を担任する。

平成5年（1993）に発足した「飯高オーヅ会」は、彼の教員時代の教え子やゆかりの人たちで構成されて、教員安二郎を顕彰する活動をしていることはよく知られている。私は小学校の頃、夏休みになると飯高町森にある亡父の実家に次兄と一緒に何度か厄介になったりした（家計に余裕がなかったから、つかの間の口減らしだったのだろう）。森までのバスは延々と櫛田川沿いを走り、途中宮前でしばらく休んで、またさらに何キロか先の父の在所に進んだ。まさかその宮前の地で小津安二郎が代用教員していたとは！

教室で小津は生徒たちに映画のあらすじを巧みに話して喜ばせ、週末には長い道を松阪まで帰って映画を見たという。松阪駅からのバスは、子供心にずいぶん長かったように思ったが、宮前から松阪平生町まで、当時2時間近くはかかったのではないか。もって彼の映画熱を知ることができる。

叔父のつてで松竹蒲田撮影所に入社

翌大正12（1923）年に上京、叔父のつてで、松竹キネマ蒲田撮影所の撮影部助手として入社。ともかくも初志貫徹で、新興の映画産業に身を置き、松阪で蓄えた映画知識を武器に意気揚々たるものがあったろう。当時の小津安二郎の風貌について、小津より二つ年長の脚本家北村小松が、

> 小津安二郎は最初キャメラの助手をしていた事がある。たくましいボクサーかレスラーの様な体格で、時々首に、手拭を巻いて、アンダーシャツに下駄（げた）などをはいていた事もある。

と昭和30年（1955）に書いた文章を、田中真澄が「小津安二郎周游（上）」で紹介している（岩波現代文庫、2013年、4ページ）。松阪で柔道や相撲などの格闘技を好んだ名残が、そんな印象を与えたのかも知れないが、何よりも居場所を得た思いが強く出ていたのだろう。

以後1年間は東京青山近衛歩兵第4連隊への入営、伍長で除隊した後、大正15年（1926）23歳でサード助監督となり、希望していた監督への道が開ける。そして翌年9月念願の監督第一作の時代劇「懺悔（ざんげ）の刃（やいば）」を撮った。同月末に久居の連隊に予備役招集を受けたため、最初のシーンは先輩の斎藤寅次郎が撮ったという。

以後昭和3年（1928）、28歳の小津は「若人の夢」、「女房紛失」、「カボチャ」、「引っ越し夫婦」、「肉体美」と5作、翌年2月「宝の山」さらに4月「学生ロマンス若き日」を監督。現存している小津のフィルム中最古のもので、幸い市販のDVDで見ることができる。一瞥（いちべつ）して監督当初の小津の映画を鑑賞することにしよう。

「若き日」は全編1時間43分のサイレント長編で、当時はやった活弁、すなわち弁士がストーリーを解説して画面の字幕以上に話したのか。チャンバラの活劇はやたらと三味線や洋楽器を連ね、音楽も伴奏された。今もやる人があってイメージがあって、それこそチャン、チャバラバラと景気よく伴奏し、るが、小津の現代劇がどんなも口角泡を吹き、修羅場を立られたかは想像もできない。に水のごとくしゃべって人気サイレントの画面に添って見たが、さて現代劇はどんなこう。

（毎週土曜掲

宮前尋常小学校跡に立つ小津安二郎先生敬慕之碑＝飯高町宮前で

【柏木隆雄さん（79）略歴】
1944（昭和19）年、松市殿町生まれ。大阪大学、大前大学名誉教授。著書に「ルザック詳説」、翻訳にバルック著「暗黒事件」など。

夕刊三重　11月18日

松阪の知の系譜

本居宣長 小津久足 小津安二郎 106

フランス文学者
柏木隆雄

小津映画のルーツ

小津安二郎の大正10年（1921）の日記の冒頭、1月2日に「余りに屠蘇（とそ）を祝いすぎた」とあって、「さしみ、正月の馳走（ちそう）で酒を飲んだ処（ところ）、生まれて始めてだったので吐瀉（としゃ）した」とある。

小津は後年脚本を書くのに、ベテラン脚本家で盟友、野田高梧（1893～1968年）の蓼科にある別荘で、地酒「ダイヤ菊」の一升瓶を毎日何本も空けてから執筆に掛かったのは有名な話だが、この酒豪の飲み始めが安二郎17歳の遅きに発するのは、いささか意外だった。福沢諭吉など幼時から酒を喜んだと自伝にある。

私は四つか五つの時、たぶん屠蘇でない酒を興味本位に飲んで酔っ払った記憶がある。やはり家格正しい家は未成年に無闇に酒を飲ませはしなかったろうし、安二郎もそこは折り目正しい青年だったに違いない。この年3月旧制中学を卒業する身とて、飲酒も許されたのだろう。

同じ日付の記事に「夜は乾（安二郎の友人）を誘い神楽座にウィリアム・ダンガン、カロル・ホエルノ共演銘打って戦闘の跡を見に行く」とある。

蓮見重彦「監督小津安二郎」（ちくま学芸文庫、1992年）に添えられた関口良一作成の「年譜」に、大正6年（1917）小津14歳の時に見たアメリカ映画「シヴィリゼーション」（トマス・H・インス監督）を見て、映画監督になろうと決心。既に、自宅近くの小屋（おそらく神楽座＝柏木注）で「松之助のカツドウ」を見て映画が病みつきになり、「クオヴァディス」、「ポンペイ最後の日」など「イタリア歴史映画が名古屋に来た時には、学校を休んで見に行く。

と書かれている。それは後の小津の記事や記憶や会話の記事によったもので、小津自身によるその時期の記録は残っていない。その翌年の「大正7年」の日記には、一年を通して映画を見たことは全く書かれていない。きっと見たに違いないのだろうが、おそらくは寄宿生活の窮屈さから映画館に出入りすることは、日記においても秘すべきこととしていたのだろうか。大正10年1月2日に最初の飲酒体験とともに、神楽座での映画鑑賞についても、あたかも禁を破ったかのように年頭に書き記されるのは、極めて象徴的なことのように思われる。

旧制中学卒業の年 どんどん映画に傾斜

そして1月6日にも神楽座。その時見た映画の感想を書いたのか、彼が設立した「キネマ同好会」に同日発信している。さらに12日、15日、20日、23日と1月は記事だけでも6回はキネマに出掛けたことが分かる。2月以降はさらに増え、外国の俳優や映画会社に手紙を出し、東京の浅草電気館やキネマ倶楽部（クラブ）、千代田館、帝国座などにプログラムを注文するなど、ますます映画にのめり込んでいく。

6月も終わりごろからは、ほとんど映画関係の記事のみで埋まり、どんな映画を見たか、どこでつどんな映画が上映されているの情報にあふれる。小津が始め「キネマ倶楽部」への寄稿用でもろうし、兄新一の通う神戸高等業学校への入学試験に落ちての人生活の間に立ち上げた映画研会「EGYPT CLUB」への筆の材料ともなったのだろう。年間の代用教員を経て出京、映界を志すのは「水至りて渠（きなる」で、自然の運びというほかない。

今、小津の映画、ましてサイレト映画を親しく見る機会はなかない。しかしDVDやレンタで見ることはできる。まずその力を語ることから始めよう。

（毎週土曜掲

昭和10年代の神楽座（小津安二郎松阪記念館提供）

【柏木隆雄さん（79）略歴】
1944（昭和19）年、松阪市殿町生まれ。大阪大学、大手前大学名誉教授。著書に「バルザック詳説」、翻訳にバルザック著「暗黒事件」など。

松阪の知の系譜

本居宣長 小津久足 小津安二郎

105

フランス文学者
柏木隆雄

日記に見る映画の淵源

小津安二郎松阪記念館編「小津安二郎松阪日記　大正七年・十年」（松阪市、2022年）は、古い松阪を知る者には、誠に興趣尽きない。大正2年（1913）生まれの私の母がもし生きていれば（50歳で亡くなっているから、もとより不可能だが）、大喜びで懐かしい地名や店、登場人物を説明してくれたに違いない。

しかし小津の映画を知る人にとっても「松阪日記」は示唆するものが多い。たとえば大正7（1918）年1月12日の記述に、山田駅前「前田屋」で、第四中学（翌年宇治山田中学と改称。通称やまちゅう）の飯南郡出身者たちの「飯南会」に出席しての記事に、

久留（くる）君の詩吟・演説に感心した。

とあるのは、映画「彼岸花」（1958年）で、主人公の旧制中学時代の友人が、同窓会の宴席で仲間から請われて、照れくさそうに楠木正成の「桜井の別れ」を詩吟で歌う場面を思い起こさせる。旧友を演じた笠智衆の詩吟を小津は高く買っていたというから、そのシーンが入ったのかも知れないが、中学時代のこの時の感動も関係しているのではないか。「松阪日記」の懇切な注によれば、久留君は松阪病院長の長男威（たけし）で、のち院長、弟勝（まさる）は小津ががんを病んだ際の国立がんセンター長というから、出京後も交際は続いていただろう。

また同年9月3日、「帰舎ラ場前の草取り一限の体操も少し草を抜いた。」の記事に、寄宿舎の舎監、槌賀安平の指導は草取りにも及んだ」と注され、これも「父ありき」（1937年）にある「草取りの際の生徒が言葉を交わすシーン」の「基となったのは小津の寄宿舎での体験だったかもしれない。」という。

宇治山田中学校門前、柔道着姿の17歳の安二郎（右端）（小津安二郎松阪記念館提供）

「松阪日記」現在欠けている大正9年（1920）11歳、中学4年）に収められた「槌賀安平先生」の中に、槌賀からたたき込まれた3ケ条、1、努めて自ら研究せよ。2、精密に観察実験せよ。3、正確に思考せよ、を折あるごとに暗唱させられて、一語でも間違うと立たされた、とある。槌賀は後に勤めた淡路の三原高校では「ドウラン先生」（植物採集の際肩に掛ける収集箱）と言われたというから、実地にドウランを下げて生徒と出掛ける姿が、その特徴だったのだろう。

小津もこの3カ条を事あるごとに暗唱させられていたことだろう。彼の地をはうようなローアングルや精密なカメラワークは、案外ここに淵源（えんげん）があるのかも知れない。（毎週土曜掲載）

舎監長に深い遺恨 半面、厳格さ受け継ぐ

しかし愛憎は裏返しの関係でもある。厳格な槌賀に、奔放ながら自分の筋を通す小津は反発したには違いないが、槌賀の言動は、嫌でも彼の心の中のひだに入り込んでいたのではないか。「父ありき」の草取りの場面もその表れの一つだろうし、やかましく言われたことは、後年思わずも出てくるものだ。

先日松工の友人たちと本町小西屋で1年ぶりに一泊して愉快な時間を過ごしたが、その時友人の一人が「化学の実習は掃除に始まって、掃除に終わる」と毎回指導の先生に言われたことが、入社して以来、退社してからも、仕事を始める際に思い浮かぶ、としみじみ話した。

小津の1年下の澤瀉久敬の「わが師わが友」（経済往来社、1984年）の同窓会に、槌賀の出席を欠席の理由にするほど、深い遺恨を抱くことになった。

【柏木隆雄さん（79）略歴】
1944（昭和19）年、松阪市殿町生まれ。大阪大学、大手前大学名誉教授。著書に「バルザック詳説」、翻訳にバルザック著「暗黒事件」など。

夕刊三重　11月　4日

松阪の知の系譜

本居宣長
小津久足
小津安二郎

104

フランス文学者
柏木隆雄

久足のおいの子、安二郎

干鰯（ほしか）を主とする江戸の肥料商として財を成した湯浅屋6代目与右衛門小津久足の異母弟猪蔵（1827～1906年）は、縁故ある紀州湯浅出身のまちと結婚して5代目小津新七となり、国松をもうけ、まちの没後やすと再婚、善右衛門と寅之助の二児を得る。国松のいることから、善右衛門を板倉家へ、寅之助も赤子の内に松阪近郊の大地主田中家に養子に出し、彼自身は長男を連れて維新初期の東京へ出た。

その国松が明治12年（1879）に亡くなったため、田中家から14歳の寅之助を取り戻した4年後に彼は隠居、寅之助を戸主とした。寅之助は湯浅屋9代目に見込まれて8代目与右衛門の次女きぬと結婚するが、彼女は明治28年（1895）に亡くなり、一志郡竹原村の大庄屋萩野家に生まれたあさゑと再婚、新一、安二郎、登貴、登久、信三の五児を得る。

都会の忙しい湯浅屋での勤めの中に、寅之助は幼年期を過ごした松阪が懐かしく、かつ幼い登久が虚弱なこともあって、大正2年（1913）1月、松阪在住の兄善右衛門に土地の購入を依頼、松阪市垣鼻の広い土地を購入して家族を移した。本人も帰住するつもりだったが、会社の仕事が忙しく実現しなかった。

明治36年（1903）、東京深川に生まれた安二郎が、10歳で家族とともに松阪に来たのは、その年3月。居宅近くの松阪町立第二尋常小学校4年に編入、以後大正12年（1923）3月妹登貴の女学校卒業とともに東京に帰るまでの10年間を松阪に住むことになる。

「小津安二郎松阪日記」中学時代の記録、貴重

兄新一は津中（現津高校）に学んだが、安二郎は大正5年に旧制宇治山田中学に進んで、寄宿舎生活を送る。小津安二郎松阪記念館編集の「小津安二郎松阪日記　大正七年・十年」（松阪市、2022）は、その間の小津の旧制中学時代の誠に貴重な記録となっている。

小津安二郎「松阪日記　大正七年・十年」（松阪市発行、2022年）表紙

巻頭に安二郎の父方・母方の系図が示されて複雑な姻戚関係が明確になる便宜もあり、続くページの大正9年10月1日国勢調査に基づく「松阪市街略図」は、小津日記解読に極めて重宝。各家々、商家の名前が書き記されていて、松阪にゆかりある人間には、実に懐かしく、かつ示唆されるところも多い。試みに私が生まれたお城石垣前の家を検すると、「福吉干燥（かんそう）場」となっていて、父母が結婚して住んだ家やご近所の建物はまだなかったことが分かる。

小津の日記には、山作、老伴などの店名、私の母校松阪工業も出てきて、運動場で野球もしている。

しかし何よりも驚いたのは、日記でしばしば言及される槌賀（つちが）先生のことだ。博物学の教師で、厳格なことで知られる先生だったという槌賀安平（1886～1971年）の名は、学生時代フランス哲学を教わった澤瀉久敬（ひさゆき、万葉学者の久孝の弟）の晩年の随筆集「わが師わが友」（経済往来社、1984年）に「槌賀安平先生」の一文があったことを思い出して、まさか小津の日記に！　と偶然の発見に驚いた。その書き出しにこう書かれている。

「大正時代から昭和の始めに宇治山田中学校で学んだ者たちには、（略）アンペイの名だけは鮮やかに浮かび出るだろう。実際あの怖ろしくも懐かしい安平先生の面影と思い出は、誰の脳裡（のうり）にも今なお鮮明と思う。」

鉛筆の削り方から靴磨きまで教えたという「アンペイ」が、小津安二郎には不倶戴天（ふぐたいてん）の教師だったとは！　日記の興味はますます深い。

（毎週土曜掲載）

【柏木隆雄さん（79）略歴】
1944（昭和19）年、松阪市殿町生まれ。大阪大学、大手前大学名誉教授。著書に「バルザック詳説」、翻訳にバルザック著「暗黒事件」など。

夕刊三重　10月28日

松阪の知の系譜

本居宣長　小津久足　小津安二郎

(103)

フランス文学者
柏木隆雄

久足と安二郎の関係

小津久足は24歳で松坂日野町の加藤弥右衛門の娘るいをめとって、とら、といの二女を得たが、男子に恵まれず、久足34歳の時、第5代守好（第3代理香の長男）の残した長女ゐのを養女に迎えて、津出身の川井忠三郎と娶（めあ）わせ彼を第7代とした。時代とはいえ血統に律儀な彼の性格がよく出ている。そして安政元年（1854）51歳で忠三郎に家督を譲り、以後隠居として歌稿や紀行文を筆にして楽しみ、安政5年（1858）55歳で没した。

松坂の本家に対して、初代新兵衛の次女の夫小津新七が江戸店（だな）を取り仕切り、以後小津別家として初代養子の2代目新七、その長男新三郎が3代目新七を継ぐ。その彼が34歳で死に、残された妻せゐは久足の父と再婚（連載第56回参照）、2男2女をもうけたが、久足は2代新七の出た和歌山湯浅の岩崎氏に養子を求め、せゐと父との次女くすのと結婚させて彼を4代目新七とした。

久足の父徒好もせゐも実の長男に継がせたかったろうが、本家当主の久足は、断固筋目を通したのだ。

連載第100回で、奥州から帰った久足が馬琴宅を辞す口実、「老母が待つ」の「老母」は、継母せゐではなく、本家3代目理香未亡人りせで当時72歳。大叔母とは言え、形の上で母として遇したのだろう。理香の伝記「花山道秀居士伝」は、2代目新七がりせの求めに応じて書き、それに触発されて久足が書き継いだ「家の昔がたり」は、彼女の助言無くしては成らなかった。久足はその書の末尾に「老母ことし七十九に成たまひぬ。いまだ壮健なれど、ご老耄（ろうもう）、もの忘れのうれへあるべくも、この後はかりがたければ、昔のことまのあたりに見聞きせられし老母に尋ねずしては、知れがたきこと多ければ」（菱岡憲司他編「小津久足資料集」雅俗の会発行、2019、表記は少し変えた）と書いて彼女への親近を示している。

別家5代目新七の次男の次男が監督

次の5代目新七と妻やすとの次男が小津寅之助で第6代となり、その次男が後に映画監督になる小津安二郎ということになる。

昨年12月に刊行された「小津安二郎松阪日記」の冒頭に、父方家系図があって、5代目新七の幼名が猪蔵とある。久足の父徒好、継母せゐの間にできた次男がその猪蔵で文政10年（1827）の生まれ。父徒好は翌年に亡くなっている。久足在世の折は新七家を継がせずにいたが、4代目新七とくすのの間に男子がなかったのか、かたくなに拒んでいた久足も亡くなり、くすのの末弟猪蔵を養子として跡を継がせたのだろう。紀州湯浅村出身のマツとの結婚は、その筋目を立ててのことだろうが、のちにやすと再婚して善右衛門、寅之助をもうけた。つまり小津安二郎は、久足の異母弟の孫ということになる。

小津久足が書き記した系図

「小津安二郎松阪日記　大正七年・十年」は、昨年12月私が三姉の葬儀に帰省した際、式の空き時間に「小津安二郎記念館」にあいさつに伺うと、記念館の岩岡太郎学芸員が、ちょうどこの本が出たところだ、と事務室の書棚から一冊取り出されたのを、文字通り「奇貨おくべし」と、その場で購入させていただいた。

その時、2月あたりから小津安二郎に入る予定です、と話していたのが、馬琴と小津久足、篠斎の関係を説くのに手間取って、なかなか小津安二郎までたどり着けなかった。ようやく次回から最後のスパートをかけるべく準備をしている。

（毎週土曜掲載）

【柏木隆雄さん（79）略歴】
1944（昭和19）年、松阪市殿町生まれ。大阪大学、大手前大学名誉教授。著書に「バルザック詳説」、翻訳に「バルザック著「暗黒事件」など。

夕刊三重　10月21日

松阪の知の系譜

本居宣長
小津久足
小津安二郎

102

フランス文学者
柏木隆雄

自作和歌集41冊と紀行46冊出版はせず

文化14年（1817）、小津久足14歳の「丁丑（ていちゅう）詠稿」から、54歳の安政4年（1857）「丁巳（ていし）詠稿」まで41冊の自作和歌集は、全て自筆稿として残り、刊行されることはなかったし、文政5年（1822）、19歳の吉野行の最初の紀行文から、安政3年（1856）、久足53歳での最終46冊目「梅の下風」まで、これも自筆稿あるいは写本で、久足の存命中には出版されていない。

馬琴が久足の紀行や批評の稿を書き写させて友人に送ったりするのも、江戸の文化、和本のありようを知って、はじめて風雅の人々の濃密な交際と文化の緩やかながら深い侵透を思いやることができる。先にも引いた鴎外「伊沢蘭軒」に、蘭軒が文化3年（1806）長崎に赴いた際の「長崎紀行」のほぼ全文が、新聞連載の第29回から第51回の長きにわたって紹介されているが、叙事簡潔な中に旅程の風物や知人との交際のありようが情趣豊かに記されて、久足の紀行とはまた別種の趣がある。

蘭軒の紀行が家族や管茶山など知人を除いては、鴎外が紹介するまでほとんど一般の読者を持たなかったのと同じように、久足の紀行文も、馬琴の書簡や日記、著書を手掛かりに久足の文業が知られて、菱岡氏を中心とする研究者たちによって「発見」されて、翻刻もされ、いわゆる「紀行文の馬琴」（板坂耀子）とまで称せられるようになったのは、久足にとって僥倖（ぎょうこう）ともいうべき事象だったはずだ。

もとより彼自身が紀行文をもって名声を得ようなどとは思ってもみなかったろう。少なくとも、あくまで自分の風流の趣味を、実践し、自分の目でその事実を、紀行のありようを文にまとめて残し、その筆記する過程で、一人愉悦を楽しんだのではなかろうか。

最後の紀行は松阪近郊

彼の紀行文を年代順に読み進むと、歌稿を追っていく以上に、叙述の筆がゆったりと、自ら楽しむ風になっている。そしてその足の及ぶ所、京、大坂、奈良を中心に、遠くはみちのく、近くは松阪近郊への旅の叙事的な記録と、折に触れての個人的な感慨の吐露が、誰に聞かせるのではなく、あくまで自分自身のつぶやきとして書かれている。

その意味で死の2年前、最後の紀行文「梅の下風」が松阪近郊を叙したものであるのは興味深い。「ふるさとへ廻（めぐ）る六部は気の弱り」という古川柳があるが、六部＝仏像を入れた箱を背負って米銭を乞うて諸国を歩く巡礼）長年にわたる旅の記録の締めくくりを故郷松阪とするところに、久足の「旅」への感慨の帰結があるように思われる。

「人生は旅」。ある意味で「人生は旅」こそが、風雅に生きた久足の55年の生涯を貫く意識だったのではなかろうか。このことは、彼の遺となる映画監督小津安二郎の作にも通じるものがあるような気がする。

（毎週土曜掲載）

【柏木隆雄さん（79）略歴】
1944（昭和19）年、松阪市殿町生まれ。大阪大学、大手前大学名誉教授。著書に「バルザック詳説」、翻訳にバルザック著「暗黒事件」など。

中野三敏「和本のすすめ」（岩波新書、2011）表紙

夕刊三重　10月14日

松阪の知の系譜

本居宣長
小津久足
(101) 小津安二郎

フランス文学者
柏木隆雄

「陸奥日記」を味わう

馬琴がその道中話を楽しみにした天保11年（1840）2月27日から3月27日まで、江戸から筑波、水戸、仙台、松島、日光への旅「陸奥（みちのく）日記」全3冊は、現存する彼の紀行文46編中22作目で、久足年37。中巻の景勝松島に宿った一文を例に引けば、

> 夜の様は、ことさらなれば、その堂の欄干にも寄り掛かりて、（略）。静かに眺めいたるほど、金波いと静かにて、言わんかたなき景色なれば、宿に帰り、船調（ととの）えさせて、御（お）島に寄せさせ、その島に上がり、そこかしこ見めぐるに、八房の梅という名ある木立、折しも盛りにて、そこはかとなく匂いつつ、甚だよし（趣き）あるよ〈夜〉の様也（なり）。
>
> まつしまや　をしまの月を　慕いきて、思わず手折る　梅の一枝

（東北大学大学院東北文化研究室刊「陸奥日記」、2018）

表記を読みやすく改めたので、原文の風情を損なうところもあろうが、さすがに「千里の道を行き、万巻の書を読む」境に至った風雅の筆で、ここでも「八房の梅」など、「八犬伝」の筆法を想起して、帰途馬琴に語るのを忘れなかっただろう。全3冊、土地の来歴、人情、率直な旅の感慨を尽くして遺憾が無い。

この書が久足研究家菱岡憲司氏の協力を得て東北大学の東北文化研究室から翻刻刊行されたのは、2011年3月11日の東日本大震災を契機に、被災地の大半を踏破した「陸奥日記」を貴重な資料として、その解読研究会が発足したことによる。

現代の小説に意外な形で取り上げられる

「陸奥日記」は、また意外な形で現代作家に取り上げられてもいる。「新潮」2021年10月号掲載の乗代雄介の「皆のあらばしり」という中編。栃木の旧家に残る蔵書目録に、小津久足の「陸奥日記」と並んで「皆のあらばしり」という未知の書名があり、旧家を知る歴史好きの高校生と、久足の幻の書を手に入れようとする中年の古書コレクターの奇妙な交友を柱に、古書の虚実が語られる一種の歴史ファンタジーとでも言おうか。おそらく菱岡氏の著作や「陸奥日記」の翻刻を元に作られたとおぼしい。その中年男がむやみと下品な関西弁をしゃべるのが、関西弁を愛する私としては多少へきえきするところがあるが、要領よく久足の紀行をまとめているところは、さすがにその年の三島由紀夫賞作家の手腕と言うべきか。

それにしても、テレビのサスペンスドラマでも、中途半端な悪漢は関西弁をしゃべり、途中で真犯人に殺されて終わり、というのが多いが、関西弁は吉本新喜劇の独占でない。それこそ文我師匠の話を聞いてくれ、と言いたいところだが、作中の中年男にわざわざ関西弁をしゃべらせる小説的必要があるのかどうか、私には大いにいぶかしい。

馬琴日記はこの時期が欠けているので、円熟期の久足紀行文についての感想を知ることができない。初期の「花染日記」（天保2年〈1831〉）は、天保6年正月11日「写し取り候て、直（じか）に黙老（高松藩家老）へかし候ところ、かの方にても写し度（たき）よしにて、今に返し不申候。」と久足に書いて、珍重したことが分かる。

馬琴の手紙にも言うように、当時紀行文は、風雅の友としてよりも、貝原益軒の書と同じく、旅行する際の参考として書写することも多かったようだ。例えば鴎外「伊沢蘭軒」を読むと、蘭軒の長崎への旅行記を管茶山が借り受けているのも、その目的が主であったようだ。

（毎週土曜掲載）

「新潮」2021年10月号表紙

【柏木隆雄さん（79）略歴】
1944（昭和19）年、松阪市殿町生まれ。大阪大学、大手前大学名誉教授。著書に「バルザック詳説」、翻訳に「バルザック著「暗黒事件」など。

松阪の知の系譜

本居宣長
小津久足
小津安二郎

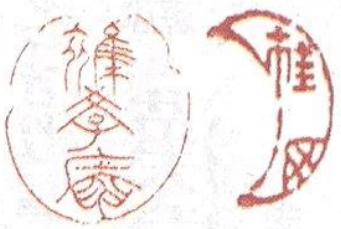
100

フランス文学者
柏木隆雄

馬琴、久足の来訪心待ち

小津久足の写本代金未払い事件は、馬琴の久足への評価を貶（おとし）めることになったが、それは飛脚便の遅れだと後に分かる。殿村篠斎に不満を訴えていた馬琴は、同日天保5年（1834）7月21日に、慌てて篠斎に弁明して、久足が支払いの際には「いつも悠々ニ御座候（ござそうろう）。君（篠斎のこと）はかくまで万事行届給（ゆきとどきたま）へるに、いかなれば御身上向（おんみのうえむき）、思召（おぼしめし）通りニならざるやらん」と、隠居の身の篠斎が金銭に行き届いているのに比べて、裕福なはずの若い久足がのんびり支払う気風に苦言を呈している。

恐らく篠斎が両者の間に入って、元通りの付き合いに戻ったのだろう。翌月16日の篠斎宛てに、ご同人（久足のこと）、御才子ニハ候得（そうらえ）ども、尚（なお）御壮年故、等閑なるべからざる事（放っておいてはいけないこと）も、等閑ニ被成候御癖（なされそうろうおんくせ）、有之候（これありそうろう）と存候へバ、一向咎（とがむ）るに足らざる事ニ御座候間、不相替（あいかわらず）親しく交遊いたし、不及（およばず）ながら、万事実意を以（もって）、交り可申存候。



小津家に残る久足の印「雑学庵」「桂窓」
（小津陽一氏提供）

と、久足の32歳という若さ（？）ゆえ、まぁ行き届かぬところがあるのは仕方がない。これからは変わらず付き合うと約束している。

以後、以前通りの綿密な手紙の往来が続き、やがて久足、篠斎、そして高松藩家老の木村黙老が送って来る「八犬伝」についての質問や批評に、作者馬琴自身が答えた文をまとめて、専門家に写させ、出版こそされていないが、「評答集」として後世に残されたのは先に述べたとおり。

先述の「八犬伝」第24巻に久足、篠斎らの長歌を掲載した翌年、天保（1840）11年4月11日の篠斎宛ての手紙に、その前日の10日、午後2時ごろに久足が来訪、空腹ということで食事を供したが、夕方4時ごろには深川の老母が待ちかねている、とのことで早々に帰った、と報告する文章に、

二月中両度、昨日共三度来訪候へども、深川より八遠方故、おそく来て早く被帰候間（かえられそうろうあいだ）、まことに愚衷（ぐちゅう＝私の思い）もつくしかね候内、分袂（ぶんけつ＝別れること）に成り、尤（もっとも）遺憾之至ニ御座候。

と最初の頃の長居を嫌った馬琴とは大違いで、久足の来訪を待ち望み、早く帰ってしまうのを惜しむほどになっている。久足がその2月27日から3月27日まで、江戸から筑波、水戸、仙台、松島、日光と旅して後の帰来であればこそ、つもる話を期待したこともあり、（久足は旅行前に2度馬琴を訪れている）、老境に至って人恋しくなったこともあろうが、何よりも久足の人と知識を真に評価するに至ったことの証しだろう。

早く辞去する言い訳「老母」とは誰だろう

久足が早く辞去する理由に「老母待ちかね」ているとした「老母」とは誰か。継母せゐだろうか。それとも実母せゐのことなら、この時久足27歳、せゐは48歳。果たして彼女が深川の江戸店にいたのかどうか。この「老母」が誰か、専門家の教を得たい。

この時の久足の奥州旅行をつづった「陸奥日記」は、2018年「東北文化資料叢書第十一集」（東北大学大学院東北文化研究室刊）に、菱岡憲司氏などを中心に翻刻されているが、本書は久足の数ある紀行文の中でも「旅した場所がいい、文体の洗練といい、いずれをとっても久足紀行文の白眉」と菱岡氏は評し、板坂耀子氏は「江戸時代そのものが生んだ東北紀行の総決算」と絶賛している。

（毎週土曜掲載）

【柏木隆雄さん（79）略歴】
1944（昭和19）年、松阪市殿町生まれ。大阪大学、大手前大学名誉教授。著書に「バルザック詳説」、翻訳にバルザック著「暗黒事件」など。

松阪の知の系譜

本居宣長
小津久足
小津安三郎

99

フランス文学者
柏木隆雄

馬琴の久足評、揺れる

武士の気概誇る馬琴 本音は商人を蔑視

文政12年（1829）2月の江戸馬琴宅での初めての久足面談の時から、馬琴の久足に対する評価は、その日記や書簡を読むと、それから数年の間はかなり揺れ動いたように思われる。

天保3年（1832）12月7日は篠斎に宛てて、久足の読書は「いまだ骨髄はさぐり得られず」とし、その4日後には、「実ニ才子ニ御座候（ござそうろう）」と褒める。しかし彼の評価はそれで確定したわけではない。さらに4カ月後の天保4年4月11日には、

予、白石手簡（新井白石の手紙）、四の巻迄（まで）校閲畢（おわる）。（略）。右いせ松坂小津新蔵（久足）之（これなく）候。「月波日記」よみのこと）所書也（書くところなり）。写させ候に誤写多く、不宜（よろしからず）ニ付、不得已（やむをえず）、先（ま）ヅ原本を校訂。この類多し。

と久足に誤写の多いことに不満を漏らす。かと思えば、その1年後の天保5年（1834）5月11日には、久足の文政12年の紀行文「月波日記」について、

あの記（「月波日記」）、御綴（つづり）被成（なされ）候節、貴兄御青年廿六（にじゅうろく）ばかりの秋の比歟（ころか）と存候。乍失礼（しつれいながら）、後生怕（おそ）るべき御大才、只（ただ）感心之外無

とべた褒めする。負けん気の強い馬琴のこの語は、字義通りというより、後進の文章を送られた大家が、とにかく当たり障りなく誉めて、敬して遠ざける趣きがある。

ところがその2カ月後の天保5年7月13日の日記には、久足が写本の代金を馬琴に未だ送らぬことに不満を漏らし、

いせ松坂小津新蔵より差越之紙包一ッ、届来ル。（略）書状一通在中（なかにあり）、然（しか）ル処（ところ）、今便も、五月中此方（このかた）写させ遣（やり）し候南朝編年録の事、何とも不申来（もうしこさず）。且（かつ）、右筆代、金三分壱朱余も不差越（さしこさせず）候。失念ハあるまじく候得ども、一体客（りん、けち）の方歟（か）、勘定延引、尤（もっとも）こころ得がたし。

と怒ったりしている。馬琴が金銭のやり取りに細かく、うるさかったことは、江戸時代の例として、し尿をくませていた農家から、代価として受け取っていた大根の数が少ないと、以後出入りを禁じた逸話にも表れているが、久足未払いの件を、すぐ篠斎に訴えている。

天保４年馬琴自筆日記表紙「馬琴日記」第３巻（中央公論社、1973年刊）

この件は、飛脚が遅れたための誤解ということで決着がつくが、武士の気概を誇る馬琴の商人久足に対する、一種の本音が窺（うかが）い知れて興味深い。以後久足を商人と覚悟して付き合う、という言葉を、同じ商人である篠斎に言ってのけるところに、篠斎、久足への親近の差と、武士を誇る彼の本音が表れているというべきか。

（毎週土曜掲載）

【柏木隆雄さん（79）略歴】
1944（昭和19）年、松阪市殿町生まれ。大阪大学、大手前大学名誉教授。著書に「バルザック詳説」、翻訳に「バルザック著「暗黒事件」など。

夕刊三重　9月16日

松阪の知の系譜

本居宣長
小津久足
小津安二郎

98

フランス文学者
柏木隆雄

人を褒め過ぎるとかえって揶揄（やゆ）や嫌味になるのは、「いよ、大統領」とか、「大先生」など冷やかしの語はその類だろう。「大才子」、「適（あっぱれ）大出来」など、馬琴が「大」の字を付けて久足を褒めるのにも、ついそんな気を回したくなる。

「大」だけでなく、「才子」という語も気になる。私の個人的な語感では、「才子、才に溺（おぼ）る」の語があるように、この語もやや軽侮、揶揄の意が込められているのではなかろうか。

篠斎への手紙に馬琴が久足を「大才子」と書いた翌年、天保4年（1833）10月に、篠斎、久足に加えた馬琴のいわゆる三友の一人高松藩家老木村黙老（1774～1857年）から、当時の戯作者や戯作について問われた馬琴は、その年末に「近世物之本江戸作者部類」を稿して答え、篠斎、久足にも写本を送った。同時代、同業の作者たちについて忌憚（きたん）のない筆をふるう中で（馬琴自身についてが最も多いのも彼らしい）、芥川龍之介「戯作三昧」にもあるように、式亭三馬（1775～1822年）には極めて辛辣（しんらつ）だ。

「里見八犬伝」第24巻、馬琴の「引」（神戸女子大学「志水文庫」蔵）

馬琴はその三馬論の末尾に、彼の狂歌の師鹿津部真顔（しかつべ・まがお、1753～1829年）が「三馬は才子也（なり）」と褒めているが、良い狂歌は一つもない。「かかれば（したがって）純粋の戯作者也、明の謝肇淛（しゃちょうせい）が所云（いわゆる）、才子書を読まざるの類（たぐい）なるべし」（徳田武校注、岩波文庫。底本は久足の西荘文庫の物）と揶揄している。彼の引用する謝の随筆「五雑組」（ござっそ）は、馬琴の愛読書の一つだ。

久足を「大才子」と揶揄（やゆ）

また同時代の著名な漢詩人菅茶山（かん・ちゃざん、1748～1827年）も、福山藩の医官伊沢蘭軒（1777～1829年）に寄せた文政5年（1822）3月9日の手紙に、蘭軒の長男榛軒の詩を19歳ながら目を驚かすものがあると褒めたあと、「才子は浮躁（ふそう、浮かれ騒ぐ意）なりやすきものに候。」と書いて真面目な読書を勧めている（森鴎外「伊沢蘭軒」第127回）。

おそらくは茶山も馬琴と同様「五雑組」の謝の言葉を踏まえており、ここでも「才子」の語は、いささか浮薄に傾きがちな、いわゆるこざかしげな人士に呈する称とする点で共通する。

つまり「才子」は、あくまでも年長者が年少の才能ある人間について、第三者に向かって使う言葉で、その逆はあり得ないだろう。馬琴が久足を「只（ただ）その皮肉（上っ面）を見つるのミ、いまだ骨髄はさぐり得られず。」と篠斎に書き送った4日後、同じ篠斎に宛てて久足を「大才子」と称するのは、馬琴の年少の知己で、久足の先輩篠斎への心安い冗談交じりの褒め言葉だろう。「大」の字を被せたのは、まさしく「適（あっぱれ）大出来」と同巧の語に他なるまい。

和歌山の篠斎、高松の黙老と並べて「三才子」

もちろん大の字を付けず、普通に「才子」とする時には文字通りの字義にもなる。例えば久足、篠斎の長歌を載せた天保10年（1839）「八犬伝」第24巻の巻頭に、馬琴はその「引（はしがき）」に、自分の性癖から交際する人間は少ないが、和歌山の篠斎、高松の黙老、松坂の桂窓を挙げ、

約（おおよそ）這個（しゃこ）これらの）三才子。余が戯墨（ぎぼく）の諸編を見る毎（ごと）に、相喜び（一緒に喜んで）評定し、これを余に寄せて、以（もって）当否を問うを娯楽となす。（原文は漢文）

と述べている。黙老は当年72歳の馬琴より7歳、篠斎は12歳、久足は37歳、いずれも年下である。「才子」の称は至極正しい。

（毎週土曜掲載）

【柏木隆雄さん（79）略歴】
1944（昭和19）年、松阪市殿町生まれ。大阪大学、大手前大学名誉教授。著書に「バルザック詳説」、翻訳に「バルザック著「暗黒事件」など。

松阪の知の系譜

本居宣長
小津久足
小津安二郎

(97)

フランス文学者
柏木隆雄

連載を愛読しているという隣家の若奥さんから「久足という人は、ずいぶん人間くさい人ですね。長男、次男の早世後、やっと生まれた男の子で大切にされたのと、お母さんが産後に亡くなっているので、彼にきちんと説教してあげる人がいなかったのか、と感じました。経済的にも知性的にも恵まれているけど、空気が読めないというか、読もうともしない、身近にいたらかなわん人やろな」との感想を頂いた。

確かに馬琴の日記や書簡からうかがえる久足は、良く言えば伸び伸びと育った大店（おおだな）の若主人で、教養と研さん、さらに時間と財を擁して、馬琴から見てもうらやましい境遇だったろう。彼が掌中の珠（たま）として尊重されたのは間違いない。作家の伝記的資料をあまりに重視して論ずべきではないが、連載53回以降数回説いたように、彼の生い立ちや境遇は、潔癖かつ繊細の中にも自信にあふれる彼の人格形成や作歌に、大きな要素として働いたと思われる。

篠斎宛て馬琴書簡（中央公論社刊『馬琴日記』第1巻、月報所載

久足以上に馬琴が心友として接した篠斎は、もともと殿村家の分家から本家を継いだ人で、それなりの苦労も多くしたはずだ。天保元年（1830）、紀州藩江戸屋敷の命じた非常手当金の分担額600両が工面できず、長谷川、小津両家に依頼するなど、やや経営が傾きかけ、久足と馬琴が初めて面談した天保3年には息子に家督を譲って隠居、翌年2月に和歌山に居を移した（吉田悦之「殿村安守」、2012年刊「松阪学ことはじめ」所収）。書簡のやり取りに松阪、和歌山の遠近はあまり関係しないだろうが、馬琴の久足への親近は、篠斎の隠居も多少影響したかも知れない。

篠斎宛て書簡に久足評

褒め言葉というより心許した友への軽口

例えば篠斎隠居の天保3年11月26日に、久足に宛てて馬琴は、

貴兄ハ御年若の御事故（おんことゆえ）、かようの義も申試候。（略）あハれ、御業用のいとまいとま、小説を御よみ被成候（なされそうら）へかし。歌と小説にて、相応二口が利け候へバ、和漢の学者ニ御座候。

と励ますが、その1カ月後の12月7日、篠斎に宛てては、

桂窓ぬしの評、至れり尽くせり。かいなでの看官の及ぶべきにあらず。さりながら、只（ただ）その皮肉（上っ面）を見つるのミ、いまだ骨髄はさぐり得られず。

とまずその評を「至れり尽くせり」と褒めながら、しかし結句に読み方の浅さを指摘して、篠斎の同意を得ようとしていることが分かる。ところが12月11日には、

桂窓主（ぬし）、ちか比（ごろ）ハ小説物ニ身を入れられ候よし。大才子ニ候へバ、吾党（わとう）の人、末頼もしく奉存候（ぞんじたてまつりそうろう）。彼人の評、先便見せニ参り候。適（あっぱれ）大出来、実ニ才子ニ御座候。

と久足の有能を褒めたたえるの「大才子」の称は、馬琴の評大なることを示すと考えられが、しかしその4日前には久未熟を指摘していた馬琴が、子」と持ち上げるのは、遠慮の篠斎に宛ての言からして、の文脈を見ても、純然たる褒葉とは、必ずしも受け取れない

「小説物に身を入れられ」「末頼もしい」、「適（あっぱれ）出来」と書き連ねるのは、戯作よくある冷やかしの口調で、に宛てて、その若い知人を大するのは、心を許した友人同交わす内輪の親しい揶揄（やではなかろうか。「大才子」のついて、もう少し考えてみよう

（毎週土曜掲

【柏木隆雄さん（79）略歴】
1944（昭和19）年、松市殿町生まれ。大阪大学、大前大学名誉教授。著書に「ルザック詳説」、翻訳にバルック著「暗黒事件」など。

夕刊三重　9月2日

松阪の知の系譜

本居宣長
小津久足
小津安二郎

96

フランス文学者
柏木隆雄

馬琴の久足への親近

曲亭馬琴が12歳年下の篠斎、37歳年若の久足との数十年にわたる手紙の往来は、読むほどに巻措(かんお)く能(あた)わざるものがある。

久足は文政12年(1829)初めて馬琴と面談、3年後の天保3年(1832)2月、2回目の訪問後に、はや「八犬伝」巻頭に彼の長歌を献じるという自負に満ちた提案は、物語が大団円に向かう天保10年の第24巻に至って実現する。その10年の間、「いせ松坂人小津久足」への馬琴の評価がだんだんに変化し、手紙の内容も、古書の話から、中国書の解説、自著の腹案など、久足の質問に応じる形で、どんどんとかさが増して書き連ねられる。

今は便箋など100円で買えるが、19世紀の時代、ヨーロッパでも江戸でも紙は高価だった。バルザックが当時のジャーナリズムのあざとい現実を描いた「幻滅」(1837~43年)では、主人公の親友が新しい安価な紙の発明に奮闘するところが出てくる。当時ヨーロッパでの紙の原料は、古着などから出るぼろ布だったが、日本は楮(こうぞ)、三椏(みつまた)の植物。大変手間の要る工程だったことは、今や和紙の作り手が職人というより芸術家に近い人々になっていることからも分かる。知人の交流の根本となる紙は、極めて高価だった。

従って貴重な手紙の再生利用が図られて、襖(ふすま)や屏風(びょうぶ)の裏紙であったり、障子の破れの繕いにも使われた。名家の筆だとそれがそのまま何枚かに切り取られて軸に仕立て上げられて茶室を飾る。

馬琴の書簡が大量に現代まで残されたのも、名家の筆ということもあろうが、それだけ受け取った側が、その内容の豊富さ、貴重さに気付いていたからだろう。実際、篠斎、久足への馬琴の書簡は、愛書家、考証家、作家、出版企画者としての多面を映して遺憾がない。

馬琴自筆の「馬琴日記」第3巻の表紙(中央公論社、1973年)

2回目の訪問後に無愛想から親近感へ

当初の無愛想から次第に久足への親近を強めていく馬琴の変化は、2回目の訪問後に久足が新刊本の彫りの誤植を指摘したことから発しようが、さらにその年天保3年10月18日の書簡で古書の事、言へばさら也(なり)。古人も具眼の人ハ珍重いたし候(そうら)へども、世ニ稀ナルもの御所蔵被成候事(なされそうろうこと)、尤(もっとも)本望ニ叶(かな)ひ、ご同慶奉存候(ぞんじたてまつりそうろう)。古書珍書御好キニ候ハバ、追々御めにかけ可申候(もうすべくそうろう)。

と古書の趣味を同じくすることの喜びを率直に言い、自分の持っている物も見せよう、という親切を示す。大抵の本好きは、他に同好の士を見つけると、顔をほころばせ、相手の蔵書の中身を知りたがり、同時に自分の秘蔵の物を自慢したくなる。そしてお互い十年の知己のように感じてしまう。

久足の馬琴訪問の最初は文政11年(1828)だが、その時は面会せず、彼の日記に名があるのは天保3年の2月の訪問で、以後その年の暮れまでに5回。翌天保4年は19回、天保5年に18回。ほぼ月平均1回少足の名が記されている。

以後、おそらくは同じ程度あるいはさらに頻繁に言及されているかもしれないが、残念ながら馬琴日記の大半が保存されていた東京大学図書館が、大正12年(1923)9月の関東大震災で焼けてしまって、今やその消息を詳細には、彼の現在読み得る書簡しかない。馬琴の久足に対する評価変遷をもう少したどってみよう。

(毎週土曜日掲載)

【柏木隆雄さん(79)略歴】
1944(昭和19)年、松阪市殿町生まれ。大阪大学、大阪大学名誉教授。著書に「バルザック詳説」、翻訳にバルザック著「暗黒事件」など。

夕刊三重　8月26日

松阪の知の系譜

本居宣長
小津久足
小津安二郎

95

フランス文学者
柏木隆雄

近世文学の志水文庫
神戸女子大に寄贈

篠斎、久足と当代の大作家曲亭馬琴との風雅の（あるいは丁々発止の）交わりを説くのに時間を取って、早く今年生誕120年を迎える小津安二郎に移るのを待つ、という知己のメールが届くにつけても、期待を裏切ること甚だしく、忸怩（じくじ）たらざるを得ないが、馬琴の日記や書簡を読めば読むほど、三者の交わりは興味津々で、単に文学史的エピソードのみならず、人の友情、評価のありようにさまざまな思いを抱かせるものが多いので、もう少し続けたいと思う。

と言いながら、今夏の酷暑、お盆ということもあるので、少しだけまた寄り道となる。連載に付される挿絵については、本居宣長記念館をはじめ、多くの公共機関や個人の方々から提供いただいたが、馬琴の「八犬伝」については、神戸女子大学古典芸能研究センターの志水文庫の物をお借りした。志水文庫は大阪大学を定年退官されたあと同大学に勤務された故信多（しのだ）純一先生の号から取ったもので、先生は古浄瑠璃、近松、馬琴、そして西鶴の研究の傍ら、貴重な書物を集められ「志水文庫」と称して架蔵しておられたのを神戸女子大に寄贈された。

信多先生は京都大学で国文学を専攻されて、以来近世演劇の源となる古浄瑠璃の研究をはじめとして、近世の三大作家の研究に打ち込み、それぞれについての大著を完成された。「近松の世界」（平凡社、1991年）、「馬琴の大夢 里見八犬伝の世界」（岩波書店、2004年）、「好色一代男の研究」（岩波書店、2010年）。いずれの作家も版本の校訂から始まって、問題の数知れずある難物ばかりで、しかもその量が半端でない。それらについて、極めて実証的な態度を堅持しつつ、独自な新しい解釈を挑戦的に問う著作は、スリリングな興趣に富む。

故信多純一教授（1931～2018年）筆者撮影

故・信多（しのだ）先生のこと

阪大文学研究科は、修士論文、博士論文ともに、審査には副査として必ず専門分野の異なる他講座の教員を配する。信多先生は私の修士論文副査として初めてお会いした。先生は奈良女子大学から移られたばかりで、当年40歳。私の論はフランスの作家メリメと漱石、鏡花、龍之介との関係を論じるもので、国文学助教授の先生が主査の仏文学教授にまさって、滔々（とうとう）と批評された（この修士論文は40年近くたって「交差するまなざし」〈朝日出版社、2008年〉に再録。案外評価が高かったので、もっと早く本にしておけばよかったと後悔した）。

その12年後に仏文学助教授として大学に戻ったので、先生とは同僚の栄を担うことになったが、通勤の電車が同じこともあり、お酒の趣味も同じくして日々親しくしていただいた。先生が神戸女子大に移られて後も、いっそう頻繁にお会いしておしゃべりするのしみにした。先生が国文の研に講演を依頼された折など、も話をさせたらどうか、と主に言われて、先生の驥尾（きに付して、馬琴と坪内逍遥のさせてもらったこともある。

先生のご自宅や仕事場にも招かれたが、志水文庫の全覗（うかが）う機会がなかその頃の私は、馬琴についてぜいその小説を読むばかりで等しい。いま馬琴について弄（ろう）するにつけても、に意見を徴したい思いに駆る。先生の霊は、天上からどうにご覧になっているだろう

（毎週土曜掲

【柏木隆雄さん（79）略歴】
1944（昭和19）年、松市殿町生まれ。大阪大学、大前大学名誉教授。著書に「ルザック詳説」、翻訳にバルック著「暗黒事件」など。

夕刊三重　8月19日

松阪の知の系譜

本居宣長
小津久足
小津安二郎

94

フランス文学者
柏木隆雄

「八犬伝」に2人の長歌

文政11年（1828）25歳の久足が馬琴と初めて面談してから11年後の天保10年（1839）、「八犬伝」第二十四巻の巻頭に掲示された「里見八犬伝をほむる長歌」は、5、7の語を各59句と60句、結句「いやとほき世に　残らざらめや」（この作品がうんと遠い先の世までも残らないことがあろうか）まで、全715語を連ねた後に、返し歌として以下の2首を添える。

唐錦（からにしき）大和にしきを織り交ぜて　あやにおもしろく綴（つづ）る書（ふみ）はも

骨をかへ　形うばひて　から（唐）鳥を　喰（く）い伏せし犬はゆゆしきろかも

第1首は、衣装の縁語で、「八犬伝」の挿絵の錦絵とも絡め、「あやに」に、「綾」と「彩」、さらに「妙に、奇（あや）しくも」の意味を掛けて、作者の和漢の文における造詣（ぞうけい）の深さをたたえ、第2首は作品が「水滸伝」の換骨奪胎を巧みにしおおせていることを驚嘆するもので、「喰い伏せる」の語に、物語の発端で象徴的な役割を果たす里見義実（よしざね）の飼い犬八房（やつふさ）とヒロイン伏姫（ふせひめ、伏は人と犬の合字）を暗示する。

ここで犬に縁のない「唐鳥」が出てくるのは、正月の七草に歌う「七草なづな　唐土の鳥が　日本の国に　渡らぬ先に　ストトトン」と歌うわらべ唄を踏まえたものだろう。この長歌が掲載されるのが天保10年の正月であることを踏まえた久足の才気とユーモアをくみ取ることができる。

「南総里見八犬伝」第24巻、久足反歌、篠斎長歌の掲載ページ（神戸女子大志水文庫蔵）

とはいえ、700語以上を費やす長歌の内容は、必ずしも格別に優れた歌とは思われない。当時の和歌の常識からすれば、穏当な言葉運びに違いなかろうが、そのため随分ありきたりで、使い古された表現が連ねられ過ぎている気がする。例えば、

新しき　年の初めに　鶯（うぐいす）の　初音はあれば　梓弓（あずさゆみ）　春にしなれば　咲きいづる　花はあれども　つかの木の　いやつきつきに　このふみの出（いず）るを待ちぬ

といった箇所など、万葉集や古今集の一節が、すぐ思い浮かぶ（そしてこれこそが久足が自慢と思われるが）歌道での常句が並んでいる。他の箇所も含めて、馬琴の刊本の待ち遠しかったことを言うなら、もっと簡潔で直截（ちょくせつ）な表現を用い、きちんと作品の評価につながる言葉を盛るべきだと、現代的な感覚として思ってしまう。

篠斎の振る舞いに大人らしい配慮見る

では同じく、久足の長歌に続いて掲載された殿村篠斎の「八犬伝跋文（ばつぶん）に代えて詠める」と題した長歌はどうか。年の若い久足が以前から願っていた長歌が今回採用されることで、跋文を書くことをせず、篠斎が同じ長歌を呈しているところに、彼の大人としての、また馬琴を思いやっての思慮がうかがえるように思われる。

事繁（ことしげ）き　塵（ちり）の世よそに（世事は構わず）　かろらかに（軽いと狩るを掛ける）　かくれ蓑笠（みのかさ、馬琴の号蓑笠漁隠〈さりつぎょいん〉を掛ける）　かくろひて（隠れる）　から（唐）のやまとの（大和の）　ふみの海　漁（あさ）り翁（な）と　明け暮れに　机のうけするて（浮くと受けるの釣竿（さお）手にまかせぬ（倦む、と産むを掛ける）　年月に

以下5、7字それぞれ47句、計557文字。返し歌1首を添えて、久足よりも少なく収めている。詳しく説かないが、冒頭の音、「あ行」の音を並べるを始め、篠斎の歌の方がよりの面目を捉え、語句も近代古びた感がない。ぜひ読み比異見あれば筆者の蒙（もう）（ひら）いていただきたい。

（毎週土曜

【柏木隆雄さん（79）略歴】
1944（昭和19）年、松市殿町生まれ。大阪大学、大前大学名誉教授。著書にルザック詳説」、翻訳にバルック著「暗黒事件」など。

夕刊三重　8月5日

松阪の知の系譜

本居宣長　小津久足　小津安二郎

(93)

フランス文学者
柏木隆雄

久足、馬琴に和歌送る

7年後、第九輯で実現　篠斎の和歌と共に

久足の歌の実力は読んでいないので分からぬ、とした馬琴の気持ちを察したか、久足は自作の和歌を馬琴に送ったらしい。天保3年(1832)8月11日の篠斎宛ての手紙で、馬琴は、

> 桂窓子（けいそうし、子は敬称）より「八犬伝」八輯（しゅう）のほめ詞（ことば）を歌によみ、見せられ候。同人自慰に、稗史（はいし、小説のこと）の評を歌にていたし候事（そうろうこと）、新しからんと言われ候歟（そうろうか）、実に新奇に御座候。その内、よき御歌三四首見え候。詩ならば、なお行届可申候得（いきとどくべくもうしそうらえ）ども、惜しいかな、三十一文字ゆえ、なほこと足らぬ心地せられ、いかが被成御覧候哉（ごらんなされそうろうや）。

と書いている。

親友の年少の知人が、小説の巻頭に自作の和歌を掲げる新機軸を誇らしげに提案してきた。その対応に馬琴がいささか困惑している様子がよく分かる。送られてきた歌の中に3、4首は良い歌があるように思う、と言うのは篠斎への心配りだろうか。

久足の心を忖度（そんたく）すれば、日本の伝統として、和歌こそが王道で、江戸時代に中国の稗史から生まれた読本（よみほん）の類は、あくまで戯作に過ぎない。その和歌を王朝の物語のごとくに、読本の巻頭に置くことは、伝統には外れるが、刊行される小説にとって名誉なことではないか。まして自分が評価する「八犬伝」を賞する和歌なのだから、小説の格も一段上がる、と思ったか。

一方馬琴からすれば、漢文化から生まれた読本には、和歌よりも漢詩こそがふさわしいし、当時の知識人、とりわけ侍の身分にこだわる馬琴には、漢詩文の地位は極めて重く、表意文字の漢語を用いる漢詩は、自作の読みどころを説き尽くせようが、表音文字の和歌は31文字で、さらに掛け詞や枕詞が入っていささかまどろっこしい。それでは十分に小説の含意を解き明かせまい。

「南総里見八犬伝」第二十四巻、桂窓長歌（神戸女子大学志水文庫蔵）

久足の申し出をきっぱりと拒否するのは、篠斎との関係もあり、また自我意識は強くとも、他人の評価には敏感な馬琴にはできぬ相談で、次作を高く評価してくれて、毎々丁寧な感想を送ってくれる篠斎や久足、さらに香川高松藩の家老職にある木村黙老（もくろう、1774～1857年）も加えた3人に対しては、手紙のやり取りなど実に丁寧に接している。

自作を評価し、それに賞賛を惜しまぬ友人の言葉は、著作に自信がある馬琴には、いっそう誇らしいもので、知識人が知人の著作に序文や跋（ばつ）を書くのは、当時普通のことだが「犬夷（いぬい）評判記」の出版を見ても、馬琴は他人の批評に意を払い、尊重もしていた。

久足の提案が実現するのは7年後の天保10年（1839）刊「八犬伝」第九輯下套（とう）下の上巻二十四。馬琴の漢文の序、著作をたたえる木村黙老の漢詩、久足の長歌と反歌、さらに篠斎の長歌が併せて掲載される。

久足の「里見八犬伝をほむる歌」は、

> 筆の海　机のしまに、いさり（漁）する　人はおおけど　得がてにす（うみさち）は　（なかなか手に入らぬ）文の苑（その）の　詞のはやし　かり（狩）借りとを掛ける）くらし（暮）と暗しとを掛ける）ひとはあれども　山幸（やまさち）は　いかぬとふ（取りかねると）しかれども、わが世の君（馬琴）ことは

で始まる5、7を連ねて全文字。久足は本望だったろう。

（毎週土曜日に掲載）

【柏木隆雄さん（78）略歴】
1944（昭和19）年、松市殿町生まれ。大阪大学、前大学名誉教授。著書にルザック詳説」、翻訳にバルック著「暗黒事件」など。

松阪の知の系譜

本居宣長 小津久足 小津安二郎 ⑨③

フランス文学者
柏木隆雄

久足、馬琴に和歌送る

7年後、第九輯で実現 篠斎の和歌と共に

久足の歌の実力は読んでいないので分からぬ、とした馬琴の気持ちを察したか、久足は自作の和歌を馬琴に送ったらしい。天保3年（1832）8月11日の篠斎宛ての手紙で、馬琴は、

桂窓子（けいそうし、子は敬称）より「八犬伝」八輯（しゅう）のほめ詞（ことば）を歌によみ、見せられ候。同人自慰に、稗史（はいし、小説のこと）の評を歌にていたし候事（そうろうこと）、新しからんと言われ候歟（そうろうか）、実に新奇に御座候。その内、よき御歌三四首見え候。詩ならば、なお行届可申候得（いきとどくべくもうしそうらえ）ども、惜しいかな、三十一文字ゆえ、なほこと足らぬ心地せられ、いかが被成御覧候哉（ごらんなされそうろうや）。

と書いている。

親友の年少の知人が、小説の巻頭に自作の和歌を掲げる新機軸を誇らしげに提案してきた。その対応に馬琴がいささか困惑している様子がよく分かる。送られてきた歌の中に3、4首は良い歌があるように思う、と言うのは篠斎への心配りだろうか。

久足の心を忖度（そんたく）すれば、日本の伝統として、和歌こそが王道で、江戸時代に中国の稗史から生まれた読本（よみほん）の類は、あくまで戯作に過ぎない。その和歌を王朝の物語のごとくに、読本の巻頭に置くことは、伝統には外れるが、刊行される小説にとって名誉なことではないか。まして自分が評価する「八犬伝」を賞する和歌なのだから、小説の格も一段上がる、と思ったか。

一方馬琴からすれば、漢文化から生まれた読本には、和歌よりも漢詩こそがふさわしいし、当時の知識人、とりわけ侍の身分にこだわる馬琴には、漢詩文の地位は極めて重く、表意文字の漢語を用いる漢詩は、自作の読みどころを説き尽くせようが、表音文字の和歌は31文字で、さらに掛け詞や枕詞が入っていささかまどろっこしい。それでは十分に小説の含意を解き明かせまい。

「南総里見八犬伝」第二十四巻、桂窓長歌（神戸女子大学志水文庫蔵）

久足の申し出をきっぱりと拒否するのは、篠斎との関係もあり、また自我意識は強くとも、他人の評価には敏感な馬琴にはできぬ相談で、次作を高く評価してくれて、毎々丁寧な感想を送ってくれる篠斎や久足、さらに香川高松藩の家老職にある木村默老（もくろう、1774～1857年）も加えた3人に対しては、手紙のやり取りなど実に丁寧に接している。

自作を評価し、それに賞賛を惜しまぬ友人の言葉は、著作に自信がある馬琴には、いっそう誇らしいもので、知識人が知人の著作に序文や跋（ばつ）を書くのは、当時普通のことだが、「犬夷（いぬい）評判記」の出版を見ても、馬琴は他人の批評に意を払い、尊重もしていた。

久足の提案が実現するのは7年後の天保10年（1839）刊「八犬伝」第九輯下套（とう）下の上巻二十四。馬琴の漢文の序、著作をたたえる木村默老の漢詩、久足の長歌と反歌、さらに篠斎の長歌と反歌が併せて掲載される。

久足の「里見八犬伝をほむる長歌」は、

筆の海　机のしまに、いさり（漁）する　人はおおけど　海幸（うみさち）は　得がてにすとう（なかなか手に入らぬ）文の苑（その）　詞のはやし　かり（狩り、と借りとを掛ける）くらし（暮らしと暗しとを掛ける）ひとはあれども　山幸（やまさち）は　いとりかぬとふ（取りかねるという）しかれども、わが世の君（馬琴のことは

で始まる5、7を連ねて全715文字。久足は本望だったろう。

（毎週土曜掲載）

【柏木隆雄さん（78）略歴】
1944（昭和19）年、松阪市殿町生まれ。大阪大学、大手前大学名誉教授。著書に「バルザック詳説」、翻訳にバルザック著「暗黒事件」など。

松阪の知の系譜

本居宣長 小津久足 小津安二郎 (92)

フランス文学者
柏木隆雄

小津久足が当時の本居学徒たちから離れていく機縁として、国学の徒が批判する「漢心（からごころ）」を育（はぐく）む中国の書籍に徹底して沈潜し、儒教の規範にもうるさかった読本（よみほん）作家馬琴との親交の深まりをその一つに挙げた。（連載第91回）

ところがその馬琴は、久足と手紙を交わし始めた頃に、かえって宣長に対する評価を殿村篠斎に語る手紙を残している。

久足の宣長離れは天保2年（1831）前後から明確になるが、同じその頃、馬琴は宣長の画像を手に入れたいと篠斎に依頼し、宣長の晩年の側近だった篠斎もいろいろ奔走して、ようやく一幅を手に入れたと馬琴に報じることになる。同年10月26日の篠斎への返事で、馬琴は宣長について「壮年過ぎる頃まで、深く信じ」なかったが、近来だんだん心を引かれるようになった、と打ち明け、

みくにの為（ため）ニハ、大忠信の大家なれば、左袒（さたん＝味方）すべき事多かり。（略）生前に面会致さずとも、同じ世に生まれ合わせたるかひに（せっかく同じ時代に生まれ合わせたのだから）、画像なりともほしく思い付き候。

と、国学の大人（うし）としての成果を評価し、儒学者は新井白石、和学者は宣長、この他に心引かれる人はない、とまで断言している。

翌天保3年2月、久足の2度目の馬琴訪問は、馬琴のこの手紙の2カ月後だ。さてその時の長話の中で、馬琴は篠斎が手に入れてくれたという宣長像を話題に上げただろうか。松阪からの訪問客、しかも篠斎からの紹介ということで、おそらくは馬琴は篠斎に漏らしていた宣長への敬意を、お愛想にでも久足に示したことは大いにあり得る。

「馬琴評答集」第3巻（早稲田大学出版部、1990年）口絵　篠斎「八犬伝評」

馬琴は宣長を評価

その時馬琴より37歳年下の客気盛んな久足は、それに応じて、あるいは本居学への不満を漏らしたかも知れない。少なくとも宣長、春庭も愛した歌道を学んで大いに自信がある、とはっきり述べたようだ。

「八犬伝」に跋文（ばつぶん）か長歌を献じましょう

それは2カ月後の4月28日付篠斎への馬琴の手紙で（つまり帰郷した久足から手紙を受け取った馬琴がその返事を送って2日後）、「八犬伝」の第8輯（しゅう）を版本にするに当たって、久足が自分の跋文（ばつぶん）か長歌を献じると言っている、と馬琴が知らせていることからも分かる。

桂窓子（久足の号）の御歌、定（さだめ）て御上手に可有之候へども（上手に違いなかろうが）、いまだ一歌も見不申候（まだ見ないでいる）。御同人の口ぶりにては、尤（もっとも）御得意のご様子に付き、不斗（思わず知らず）右之ものがたりにも及び候事に御座候。乍失礼（しつれいながら）、君と同様に存候て（思って）、此（この）談に及び候には無之（これなく）、桂窓子の長うたは入レ不申候（もうさずそうろう）とても申わけは可有之候（これあるべくそうろう）。

知り合って間もない久足が、馬琴の著作の巻頭を飾るのに、「八犬伝」をたたえる長歌を捧げたい、と言い出したのに、馬琴はいささか辟易（へきえき）したのではなかろうか。久足の後見役と彼がみなしている篠斎に、久足の歌は、「きっとお上手だろうと思うけれど、まだその歌を一首も見ていず、自身の口ぶりでは得意のものらしいが、これはちょっと断ろうと思う」と率直に述べている。

馬琴、篠斎、久足それぞれのありようがよく分かる手紙の一節だ。

（毎週土曜掲載）

【柏木隆雄さん（78）略歴】
1944（昭和19）年、松阪市殿町生まれ。大阪大学、大手前大学名誉教授。著書に「バルザック詳説」、翻訳にバルザック著「暗黒事件」など。

松阪の知の系譜

本居宣長 小津久足 小津安二郎 ⑨1

フランス文学者
柏木隆雄

往復書簡で馬琴に学ぶ

本居学との決別 促すきっかけとも

馬琴の久足との初めての面談は文政12年（1829）2月。日記にそれを記し、殿村篠斎にもすぐに報告しているが、次の年12月に文政から天保に元号が変わり、翌天保2年の約2年間、馬琴日記には久足について言及なく、手紙を出した形跡も、現在残っている中では見当たらない。そして天保3年（1832）2月の初めに、前回引用して示したように、久足訪問に関する記事が多いことからすると、その間の2年は、まだ久足に対して馬琴は篠斎の知人以上の関心を持たないでいたのだろう。

それが馬琴訪問を終えた久足から無事松阪帰着の報告に加えて「八犬伝」など馬琴著作の購読を希望した手紙が届き、馬琴は彼の訪問から2カ月後の4月26日にその返事を出して以降、段々に篠斎への手紙の中でも久足についての言及が増え、久足本人へも自著出版の詳しい情報を届けるようになる。

久足はその年7月2日付の馬琴に宛てた書簡で、「八犬伝」、「侠客（きょうかく）伝」等についての読後感や不審な箇所を問うたことが、7月20日の馬琴の返書で分かる。篠斎の方は、それ以前にいっそう詳しい批評や質問を馬琴に書き送っており、松阪在住の愛読者2人からの真摯（しんし）な批評は、馬琴にとって得難い刺激となったに違いない。

天下の巨匠である馬琴が、著作の秘事を、教訓も交えながら懇切に説き明かしてくれることは、「風流人」を自負する久足青年の自信を大いに鼓舞したことだろう。

ここで久足の紀行文が、文政5年（1822）の「よしのの山裏（やまづと）」から始まって、文政11年（1828）「柳桜日記」を経て、天保2年（1831）の「花染日記」に至って、「語調が変化して、断固として自信ある文体に変わっている」（連載第74）と述べたことを思い出していただきたい。文体の変化は、貝原益軒の紀行文の影響もあろうが、馬琴の知遇を得たこと、そして巨匠から認められたと自信を得たことも大きいのではないか。

馬琴との初めての面談から2年後の天保2年2月28日未明に松坂を出て、同年4月6日帰松までの吉野、京、大阪、高野を巡る紀行「花染日記」は、久足が馬琴に傾倒し、「八犬伝」をはじめとする馬琴著作に親しむ体験から、漢学をあしざまに扱うごとき本居国学と決別する決意も萌（きざ）すことになったのだろう。

桂窓の馬琴宛ての評（「天理図書館善本叢書和書の部」第13巻〈八木書店、1973年〉口絵）

天保5年（1834）の「花鳥日記」で、「やまと魂とかいふ無益のかたくな心」は「さすがに離れたれば也」と言い、天保7年（1836）の「斑鳩日記」で春庭の主著「やちまた」を、「おのれは仮にも信じることなく、常に忌み嫌うこと甚だしく」とこき下ろすことができるようになるのは、天保3年二度目の訪問以来、当代屈指の漢文学通で、「唐（から）ごと」を基にした読本（よみほん）作家馬琴との長文の書簡のやり取りがあってこそのことだったように思われる。

天保3年11月26日の久足に宛てて馬琴が、

「金瓶梅（きんぺいばい）」と「水滸伝」が、すらすらと読め候へバ、俗語（中国文の口語）に読めぬもの八無之候（これなくそうろう）。（略）御業用のいとまいとま、小説を御よみ披成候へ（なされそうらへ）かし。歌と小説にて、相応ニ口が利（きか）れ候へバ、和漢の学者ニ御座候。

と中国小説の読書を勧める言葉は、とうてい久足の旧師本居春庭の口からは出なかったろう。

（毎週土曜掲載）

【柏木隆雄さん（78）略歴】
1944（昭和19）年、松阪市殿町生まれ。大阪大学、大手前大学名誉教授。著書に「バルザック詳説」、翻訳にバルザック著「暗黒事件」など。